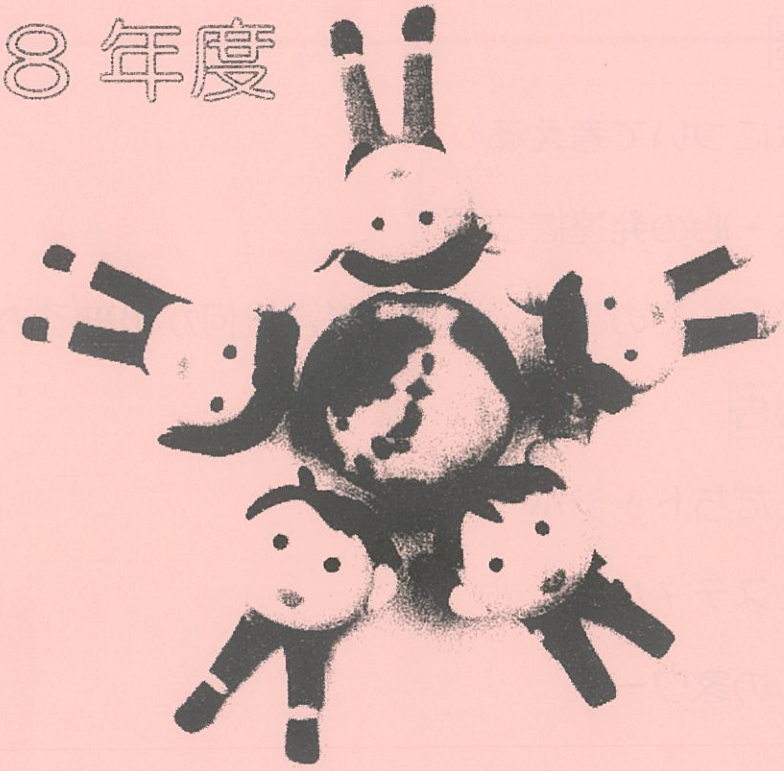
2018年度



大阪市地域福祉施設協議会

地域の子ども研究会

～地域の子どもの豊かな生活・成長を目指す～

目　次

研究活動の報告

・不登校の現状について考える

・小学生の身体・心の発達について

・地域福祉施設としての防災・減災・災害後何が出来るのか

子どもの活動報告

・第33回ともだちドッジボール大会

・ともだちフェスティバル

・びわこセツルの家ワーク

・合同遠足

・子ども将棋大会・子ども卓球大会

研修活動の報告

・研修会実施についての報告と課題

・第17回　児童部会

情報交換の報告

・「情報交換」について

1年のふりかえり

・支援員一人ひとりのふりかえり

不登校の現状について考える

はじめに

近年、子どもの現状として社会問題化されている不登校。小中高生の不登校はこの５年間で増加を続け、2017年度の文部科学省のおける調査では、過去最多の14万４千人との発表があった。中学生より小学生の増加幅大きく、小学生の不登校は１千人あたり、5．４人で、10年前に比べて1，59倍になった。2017年には教育機会確保法が施行されたこともあり、「子どもの幸せとは何か？」を考えながら、フリースクールなどの学校以外の学びの場や居場所が選択肢のひとつとして提案されることも増えてきている。

研究目的

私たちの施設や周りでも不登校になった児童、中学校に進学して休みがちになっている等、身近で起こっていることである。なぜ不登校になるのか？　不登校になる子どもや親にとって、より良い支援とは何か？　不登校の子どもにとって心のよりどころとは？　学校に戻す事が目的なのか？　不登校傾向にある子や不登校になった子、その保護者に私たちができることはどんなことなのだろうかと悩むことが増えている。

私たちは「不登校」という現状にある子どもや親への関わりを考える上で、様々な観点から地域福祉施設職員としての支援の在り方を話し合う機会を持った。さらには、当事者を目の前にして具体的にどの様な働きかけができるのかという意見交換をし、子どもたちが豊かな生活を送れるように地域福祉施設としてできることを考えていくことにした。

第１章

「住吉区の不登校に関する調査・研究調査結果報告書」（大阪市立大学 添田教授）より

不登校に区として取り組むために必要な視座や環境整備などを特定することを目的に、中学校を中心に主任児童員、区保健福祉子育て相談室へ聞き取り調査を行い、問題点を考察し、改善のための提案をおこなっている。

聞き取りを通して、不登校生徒の保護者の意識の在り方が、区の関わり方や学校と諸機関との連携機関との在り方に大きく影響していることが明らかになり、不登校のタイプを保護者の意識に着目して３つのタイプに分類している。その中でも子どもの教育・養育に対する保護者の関心が低いタイプについて掘り下げて考察されている。

上記のタイプの不登校の背景には、保護者の育児放棄や家庭内暴力、保護者自身の心身の疾患や貧困などの家庭的な要因により助長されることも少なくない。しかし、個人情報の守秘義務が障壁となり、学校に蓄積された情報が関係諸機関で共有できていない実態が聞き取りから明らかになっている。そのことにより諸問題を抱えているにも関わらず行政のサービスのネットワークから漏れてしまい、生徒の不登校の根底にあるかもしれない問題が放置され、生徒の悩みや苦しみは大きくなる。学校の教員が献身的に手を尽くしても問題解決につながらないことが少なくない。

その問題点に対し、不登校は区役所が解決するものであり学校はそれに協力するという発想に立つ事を提案している。理想像としてこのような方向性を持ちながらも、現実対応として学校ではソーシャルワーカー・主任児童委員の活用、活躍できる環境整備、絶対数を増やすこと。区役所職員等が学校関係者に行政サービスの情報説明を行うことで、行政サービスから漏れる人を見つけ出し、適切な支援の手を差し伸べる手がかりとなる。また子ども相談センター・警察等専門知識を持っている関係機関に積極的に相談していくことが提案されている。
目の前の子どものために、そして、行政サービスのネットワークから漏れてしまっている人々のために、現状の中で何ができるかを模索していくこと、また地域の人々の協力・支援も期待し結ばれている。

不登校の現象自体は、多種多様である。不登校児へ支援は、豊かな人生を送れるよう、子どもが自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すこと、という文を読み共感する。
では、目の前にいる子どもひとり一人に私たちはどう接していくのか、何ができるのかを考えていく。

第２章

各施設であった子ども達の不登校の事例を共有し、必要な支援を考える

事例：Ａ君・中学２年生男子・母子家庭・弟が１人

忘れ物が多くよく先生に指導されていた。ある時も忘れ物をしてしまい、Ａ君のせいでクラスの子も連帯責任を負わされて罰が与えられた。周りの子からも「Ａ君のせいだ」と言われる。それ以降Ａ君は担任への信頼も無くなり、周りの目が気になり、学校に行けなくなってしまう。不登校になってから先生は毎朝家に迎えに行っているがＡ君はいかない時もある。母は看護師で病院関係の知り合いに相談している。母の答えは無理にでも行かせてほうがいいという事。Ａ君は昼夜逆転になり、ネットゲームをする時間が多い。母は非行に走り、夜家を出ていくぐらいならゲームのほうがいい、という考えである。

○この事例から見えたこと

- やはり子どもの自己肯定感や自尊心の大切さを感じた。みんなの前で「こいつはできない奴」と周囲からレッテルを張られたことで学校での居づらさが増したのではないか。
- 忘れものに対する支援はあったのか？親も心配しているわりに、Ａ君に対してフォローが全くない。Ａ君へのフォローを誰がしてあげたのか？孤立していないか？
- 朝先生が迎えに行き、学校に連れていかれる状況はどうなのか？「サボりたい」・「ゲームがしたい」等で怠けているだけの理由では無く、学校に行くのがしんどい状況である。行くことも大切だが、行かせない事も大切なのか。
- 非行への心配からゲームを与える。そのゲームから抜け出す事ができるのか？昼夜逆転するほどの熱中から抜け出す方法、機会はあるのか？インターネット依存の怖さ。

○事例を見てこれまでの学びを踏まえ、働きかける

・施設の OB という事から繋がりが最初からあるという事は大きかった。弟が施設に在籍していることもあり保護者からも相談を聞くことができた。

Ａ君には、自分の思いを聞いてくれる人がいる事、受け止めてくれる居場所があるという事を感じてほしかった為、学童の行事やお迎え等いつでも来てほしいと母に伝える。行事には参加の意思を示していたが、当日急遽来なくなる。母は呆れた様子であったが、後日弟のお迎え等で学童に来る事が増えた。その時に指導員と普段の様子や、趣味の話をする事が増え、繋がりは深まったように感じる。まだ普段の話しか出ておらず、本人の悩みや相談の話は無い。

・自分のありのままを出せる居場所が必要であると感じた。そこには受け止めてくれる人、信頼できる人が必要である。そして地域福祉施設の職員だからこそ、そういった存在になれるのだと思う。
・信頼関係を深めていく状況にあり、この後の進展に向けて関わり深めていく。

○講演会「不登校の子どもの気持ち、親の気持ち」（奈良女子大学研究院生活環境科学系　伊藤先生）に参加して
・阿倍野区の不登校児・軽度発達障がい児支援グループでの取り組み
安心したありのままの自分でいられる所、そこにいるだけでホッとする所、楽しい気分になれる所を作りたいと始まったグループの取り組みを知る。小学生～高校生を対象に週２回２か所で子どもたちの居場所づくりをしている他、月１回保護者がおしゃべりできる場をつくり、当事者同士の悩みや、情報を共有できるところとなっている。また月１回物づくりをしながら知ってもらう場や、講演会を開催するなどの活動をされている。

上記グループが開催する講演会の情報をもらい、参加する事ができ、子どもの気持ちも、親の気持ちも両方をうかがい知ることができた。カウンセリングの実践を踏まえた子ども達の葛藤、当事者の当時の本当の気持ち。親が心配してくれるのがうれしかった子もいれば、親に心配をかけているのがツライ子、学校に行かなくていいよと言われて楽になった子、無理やりにでも引っ張って連れ出してくれたから、学校に行くことができるようになった子等、一人一人によって関わり方や言葉のかけ方がまったく変わる事を知った。そして親の気持ち。ある事例では子どもが週末に月曜日から学校に行く。と言ってくれたので、一緒に用意し、喜び合ったが週明け学校に行くことができなかった。親のいら立ちもあったが、それを子どもには向けずに、カウンセリングで思いが爆発したとの事。そのいら立ちを子どもに向けないように、親の気持ちも受け止め、話しできる場所と人の必要性を感じた。
一番心に残ったのは、不登校だった子の自己肯定感の話であった。不登校の子は自尊心や自己肯定感が低い印象を持っていたが、実際はそうでない。元不登校だった子に現在の様子をアンケートした資料があった。社会に出ても、不登校だった経験が今に生きていると答える子が多かった。不登校では無かった子どもと比べても自尊心や自己肯定感に変わりがなかった。過去の自分が未

来を変えるのではなく、今の自分が過去の自分を変える。そして未来に繋がって行く事を感じた。

まとめ

現在も子ども達の不登校は様々な問題を抱えて増えていっている。新聞などで取り上げられている問題も実際私たちの地域の身近な所で起こっていることである。しかし「不登校」自体が悪い事なのだろうか。言葉のマイナスイメージが独り歩きしているのではないか。「怠けている」「心が弱い」「最近の若い子は」と言う大人。「学校にどうやって行かせるか」と考える事が本当に正しいのか。子どもが学校に行かないのは必至に自分を守っている姿なのではないか。実際に伊藤先生の研究のアンケートでは不登校だったの子どもも自己肯定感が高いと出ている。必死に自分と、社会と向き合い戦った結果、自分の事を知ることができ、好きになれたのではないかと感じた。

また、不登校の子どもを持つ保護者に対しても、支えが必要である。「うちの子は不登校」という社会的なマイナスイメージもあって、周りの人にも相談しにくいのだと思う。

行き場のない感情を一人で抱え込まず、悩みを共有できる場、感情を素直に出せる場所、すべて吐き出し、また明日から子どもと向き合っていこう。と思えるような環境が必要だと思う。

様々な悩みを抱えた家庭がある中で私たちは、居場所などの環境を作って行く必要性を感じた。明日へのエネルギーを蓄えられる一日を作り出していく。「大丈夫」「一人じゃないよ」と悩みを持つ家庭を受け止められるような場所や人になる事の大切さを感じました。その中で今の自分が過去の不登校を肯定でき、未来につなげていけるような支援をしていきたいと思います。

最後に、この研究を通して、地域の身近な所にたくさんの困りや問題があったことに気付きました。私たち自身が一歩踏み出し、地域に、社会に出て様々な人々と出会い、地域の課題を見つけて行く。ニーズを待つだけでなく、ニーズを見つけて行くことも、地域福祉施設職員にとって必要なものだと思いました。

【研究活動スタッフ】
長居子どもの家　川畑　亮輔
今池こどもの家　多賀井　潤一郎
今川学園子どもの家　浅井　あすか
育徳園子どもの家　隈元　まひる

研究活動

小学生の身体・心の発達について

文責：平和の子子どもの家　岡村　慎一

【はじめに】

今年度は地域の子ども研究会の中で３つの研究テーマに分かれました。その中で私たちは、小学生の身体・心の発達について研究してきました。研究に取り組むにあたり、小学生には乳幼児の５領域の様な物はなく、明確に発達段階の分かるものがない事から、様々な文献を参考にし、年齢ごとの発達段階を探ってみようということで取り組んできました。「これが小学生だ！」というものにはならないかもしれないが、実際の現場で、子どもたちの発達段階をおさえて関われる一つのヒントとなればという思いで取り組んできました。１年取り組んできた一つの成果として、右にある表が出来ました。

◇表の作成について

学年を大きく低学年・中学年・高学年に分けることを横軸とし、縦軸は「身体・運動面」「人間関係」「遊び」「思考・言語・価値観」「課題・配慮」に分けました。

文献を参考に作成した後、全体のバランスを検討しました。横軸を比べて見た時にどう見えか、文言は実際に現場の子どもたちと重ねあわせた時にすぐにイメージ出来るものかと話し合いを重ねてきました。

ある程度形になり、それでは各施設の実際のこどもたちの姿を見た時、項目に当てはまるのかを考えていきました。例えば、中学年の人間関係の中で「親離れが始まり、自分の考えで判断し、行動する独立心・自立心が出てくる。親からの干渉を嫌がるようになる」とあります。それでは現場ではそれにあてはまる実際の姿としてどういったものがあるのか？を考えました。すると、１．２年生の頃は親が迎えに来ると駆け寄っていく姿があったが、３．４年生になると、殆どの子が親の顔も見ずにあそび続けたり、嫌がる表情を見せています。友だちと約束をして休むことも増えてきます。そういったことが見て分かる様、各学年、各項目の中でも、発達の特徴に対し、実際に見られる子どもの姿はどうなのか？を表の中に含みました。その際、自分たちの研究グループだけではなく、他施設の子どもたちではどうなのか？同じようにあてはまるのか？ということで、各項目ごとの実際の子どもの姿を記入してもらい、集約しました。

【今後について】

今回作成した表は、正確な指標でもなく、答えでもありません。しかし、ある程度の特徴を文献から作成したものに対し、実際に関わっている子どもたちが見せる姿に、「だからそういう態度をとるのか」「だから最近そういう姿なのか」と、考えるヒントになることを目的としています。まだまだ実際の姿に合わせて形を変える事が出来るものであり、研究を続けるのであれば、発達につまづきのある児童に対する関わりへも発展していくことの出来る研究テーマだと思います。

地域福祉施設としての防災・減災、災害後何が出来るのか

～災害後を見据えて、今出来る事は何か～

文責：望之門学童クラブ
大西　奈々子

研究活動のねらい

改定保育指針では“災害への備え”が記され、この先いつか起こる大規模災害を子ども達に“脅かす”のではなく“知識を得て伝え、共に考える”事の早急な必要性を感じる。特に学童期以上の子ども達は行動範囲も広がり、登下校時や外出時等大人不在の中で災害に遭遇してしまう可能性も大いにある。

防災・減災を地域福祉施設職員としての視点で、施設内で備える事・子ども達へ伝え共に考える事・地域へ発信する事は何かを考える。更には災害後の私たちの役割は何なのか。被災者であり、地域福祉施設職員従事者として出来る事・力を発揮すべき役割は何かを事前に考えておく事が自身の災害への備えと感じ本研究に至る。

方法

○各施設の避難訓練・備蓄などの情報交換
○小学生との避難訓練は
○防災センター等施設見学
○保育に取り入れられる（子どもと出来る）災害の備えについて考える
○災害シュミレーション（小学生の登下校時などを設定して）
○子どもの生活を見守り遊びを提供するプロとして、何が出来るか？災害後の心構えを討議する中で当事者意識を持ち、信念を持って何を訴えていくかを考える。

第１章

各施設の避難訓練方法・備蓄などについて
・各施設の避難訓練の方法や備蓄の有無、内容について聞き取り一覧を作成

避難訓練について	【年間】 ○火災７回（延長保育時間年３回）、地震５回、不審者１回 ○火災４回、地震５回、水害２回等 年間計画が組まれているところが多い。 ・乳児は保育室に避難靴の確保あり ・幼児は防災頭巾をかぶる、 ・携帯や全園児・職員連絡先一覧を１つにファイリングし持ち出し。 ・大規模災害想定の避難訓練時には担任以外の大人の確保も視野に。 ・園内アナウンス後、保育園園庭に避難。子ども・職員に発生場所の確認があり、避難経路が安全かの検討。
時間帯について （固定・不定）	固定 ・毎月第三月曜　１０時～ 不定 ・主に午前中、年に１回午睡中、年に１回職員にも予告なし ・１０時からやおやつ後、職員に知らせずに ・様々な時間帯で予告なしの臨時訓練も実施 ・午前・午後を周知して行う場合と告知なしで行う時がある ・朝・午睡時・プール入水時・夕方・延長時間時等不定で計画されて行う。時間帯・災害内容・ねらいなどが記載された避難訓練計画書を貼りだす。
	【告知無しの意図】 いつ災害が起きても対応できるスキルを職員がつける為。 【有りの意図】 計画書を見てその時間帯の保育中に災害が起こった際に何が必要かを先に考え計画しておき、保育の方法や各クラスの環境作りを見直す機会とする。
避難袋	【あり／なし】 ・避難用リュックは各園１個ずつ、避難用カート・防災用ベッド・防災用クッションあり ・子どもが触らない場所に置き、月に一度中身のチェックをする。 ・分園に１袋、本園に２袋、出入口に置いている（東日本大震災の日を目安に見直している） ・各クラス１～２ケ（水・乾パン・軍手・ウエットティッシュ・懐中電灯・紙パンツ・粉ミルク・哺乳瓶・携帯ラジオ等）クラス担任が必要だと思うもの
備蓄庫	・３F、事務所（食料、水） ・水、クラッカー、各クラスの避難袋に水、カンパン、厨房に缶づめ ・飲料水　40L、非常食　53食 ・倉庫の１カ所を備蓄庫に、年に１回見直し期限切れの近いものは事前に購入している ・保育園３階に保管（非常用トイレセット・哺乳専用加熱キット・使い切り哺乳ボトル・粉ミルク・水・米粉クッキー・マジックライス・野菜がゆ・ケチャップライス等）
その他取り組まれている事を記入（講師を呼ぶ・消防署と…等）	・大阪府の一斉避難訓練に参加 ・消防署を呼び、消火訓練や、避難訓練を行う。 ・移動式家具は全て床に穴を空け金具で固定、現在順番に電気を飛散防止タイプに変えている、消火器設置場所一覧を掲示している ・保護者が年度始めに提出する緊急連絡票の裏面には災害時に引き渡しが出来る人を記

	入してもらっている ・館内に子ども達自身で安全な場所がわかるよう掲示している

第２章

小学生との避難訓練とは

・各施設の避難訓練の取り組みや現状を指導員としてどう思っているかを聞き取る。

小学生との避難訓練について

・保育園計画と共に行う。学童単体での訓練は実施なし。子ども達と話す程度

・夕方の実施の時や夏休み・冬休みなど、保育園の時間に合わせて出来る時に参加しているところが多い。

→言い換えれば、時間が合わなければ行っていない・保育園避難訓練自体に“学童児が避難する”事を想定されていないのではないか？

・年３回程度、その他年２回建物全体の避難訓練

・いろいろな場面（学童、下校時、公園、塾）（火災、地震等）を想定してどうするかを考えている

指導員として自施設の現状をどう思いますか？

・保育園として訓練は出来ているが、備蓄などは整っていない状況である。学童としては、単独では避難訓練が中々出来ない状況である。

・小学生はほとんど保育園の避難訓練に参加出来ていない事に危機感はある。たまに参加できても遊び半分になってしまう。小学生対象の訓練も行いたいが中々実現は出来ていない。

・今回の調査まで備蓄庫の場所や何があるかを把握出来ていなかった。

・本当に避難しなくてはいけない時に何も出来ない。延長・早朝など保育士が全員そろっていない時に何も出来なさそう。

・学童の子どもたちとは保護者の要望により避難訓練回数を増やした。ただ、本当に震災が起こった時に備蓄などは無いため、不安はある。

・訓練や環境見直しの為、講師を呼びたい。

・施設内の安全面の環境について、現場からもっと声をあげて欲しい

・分園の災害時の出口が心配である

・訓練はこまめに行っており、反省が生かされている

・本当に避難しなくてはいけない時になにも出来ない。延長・早朝など保育士が全員そろっていない時にないもできなさそう。

・子どもの家での防災ヘルメット、避難靴、備蓄についてなど考えないといけないと思った

・特に大型災害の避難訓練の場合にはプール入水時など日常と違う所で考えるようにしているが、本当にこれで大丈夫なのかと不安に思う事が多い。子どものみで外出している時や下校時などまだまだ子ども自身に考える力をつけさせる必要を感じるが、大人も地域の環境の中で危険性をわかっていない事が多く子どもへどう伝えたら良いかを悩む所です。

第３章

阿倍野防災センター施設見学へ

・各施設の避難訓練方法や避難袋・備蓄庫の内容を調査した結果、今の備えで十分であるかの確認と防災・減災についての取り組みについて新たな視点を持つ事が出来るよう行う。

【災害への備え】

非常持ち出し袋の点検

・年に２～３回点検

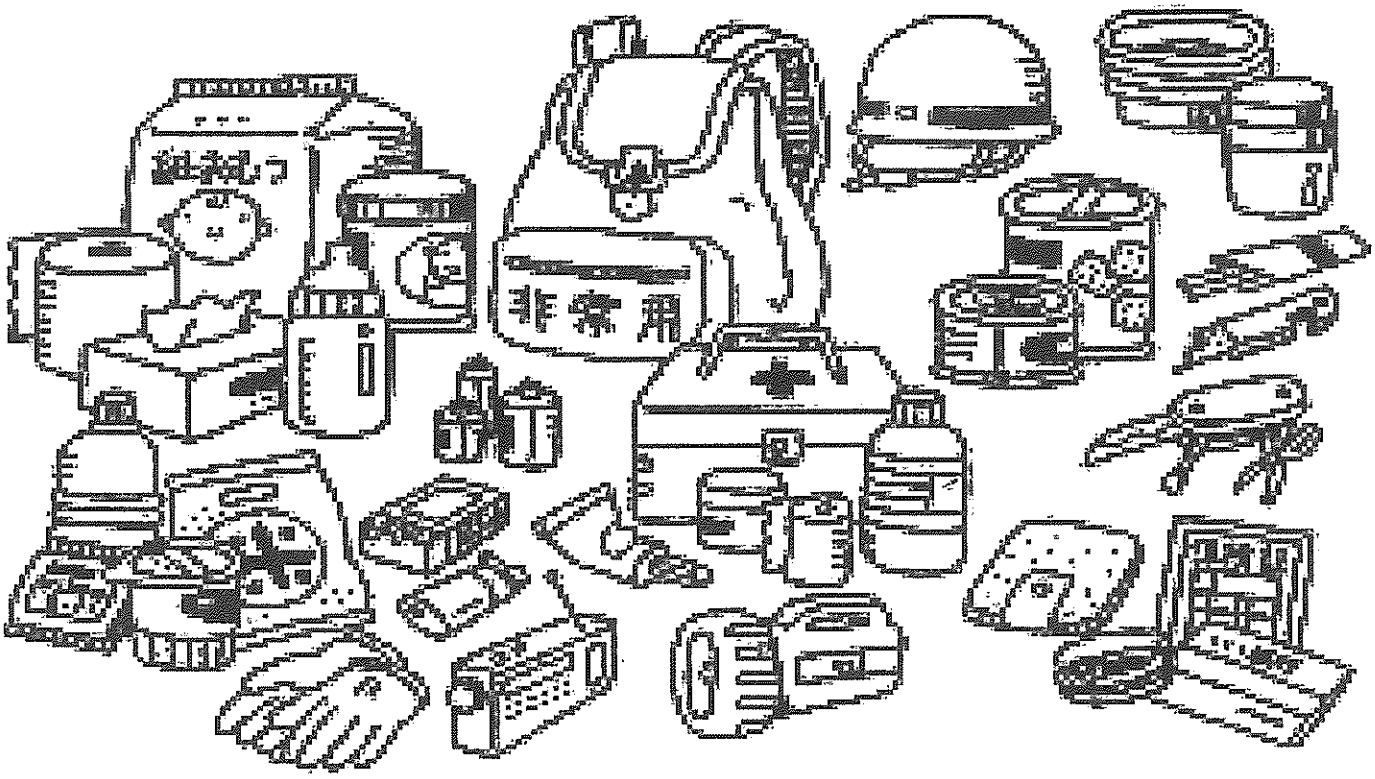
・いざというとき、いつでも持ち出せるように身近で目につきやすいところ（寝室や玄関など）に置いておく

・アドレス帳や筆記用具は、避難所等で安否の連絡をする時には必要。

・日頃から服用している薬を持ち出せるようにしておく。

・紙おむつ、ミルク、哺乳瓶、離乳食、衣類等をリュックなどに入れて準備しておく。

・かかりつけの小児科の連絡先を準備しておく。



食料・飲料水の準備

・大災害の時には、３日分くらいの食料・飲料水を用意しておきましょう。

【缶詰、レトルト食品、アルファ化米などを備え、定期的に取り替えるように】

【カセットコンロや固形燃料も準備しておくと良い】

・災害時には１日一人約３リットルの水が必要。

【ポリタンクで用意しておくと断水時の給水車から飲料水を運ぶ時や家から生活用水を運ぶ時に役立つ】

備蓄と準備物

・災害に備えて、情報を得たり受けたりする機器、復旧作業のための道具、食糧や水、個人ごとにヘルメット･手袋･スニーカーなどの徒歩での帰宅時に必要な用具も準備しておくべき。

【携帯ラジオ、携帯ファックス、パソコン、自転車、拡声器、トランシーバ、掲示板など】

・災害対策や復旧作業のため、職場から被災した街を通って徒歩で帰宅する必要が出てくることを考えて

【消火器、ヘルメット、手袋、タオル、懐中電灯、万能斧、ロープ、担架、救急箱、毛布などの物資】

【最低一日分のレトルト食品、飲料水、缶詰などの食料とカセットコンロ、やかん、紙皿、紙コップ等の食器やゴミ袋】

・生活面ではトイレ対策が重要で、【簡易トイレ】などの準備も考慮しておく。

・緊急用の現金も準備。

常備薬品の準備

災害時には、負傷した人々の措置で診察に時間のかかることが予想されるため、軽いけがに対応する応急処置用医薬品を準備しておく。

【消毒液、傷薬、三角巾、ガーゼ、包帯、脱脂綿、絆創膏、目薬、胃腸薬、解熱剤、鎮痛剤、体温計、湿布薬など】

避難器具の準備と点検・救出に役立つ工具等の準備

・２階や３階から避難する時の為に「避難ばしご」を、10～20 メートルのロープも役立つ。

・大工道具（のこぎり、ペンチ、バール、ハンマー、スコップ、斧など）を用意しておくと、壊れた建物や倒れた家具の下じきになった人を助け出そうとするときに役立つ。

風呂の水は常にためておく

・風呂や洗濯機に水をためておく習慣をつけておくと、災害の時には生活用水や消火用水として役立ちます。

【大人の役割】

避難通路を確保する

・廊下や階段など、避難する時の通路となる場所にも荷物や備品がおかれていたり、防火扉が閉まらなくなっていないか？また物が置かれているために非常誘導灯などが見えなくなっている所が無いかを点検し、改善のための配置を検討する。

緊急時の連絡網作成

・連絡網を作り、NTT のボイスボックスなどを利用して災害時に職員や家族に連絡を取る方法を確立しておく。

・災害は就業時間中にだけ発生するとは限りません。あらかじめ、職員や子ども、家族の安否確認の為の連絡網を作成しておく

・NTT の「ボイスボックス」というサービスも連絡網として有効。災害時に被災地の安否情報の

確認などを伝言の録音・再生で行なう仕組みに NTT の「災害用伝言ダイヤル」があるが、事業所は使ってはいけないことになっているため、災害用伝言ダイヤルの事業所版と言えるのが、「ボイスボックス」。

災害対策マニュアル作成

マニュアル作成のポイント

●簡潔で理解しやすい
●役割とポイント程度にして細かくしない
●責任者と、その代行者を決めておく
●3 層構成に(個人用・現場用・本部用)
●個人用は全員配布で常時携帯を促す
●その場にいる人員のみで緊急対応
●事業所責任者との緊急連絡ホットラインを確保

【子どもと取り組む事・伝えたい事】

【子どもに伝えたい事】災害発生！その時（まず自分の身を守る）

家の中にいた→まず頭の保護

地震（じしん）でゆれたら、まず自分の頭のガードが大切です。テーブルなどの下にかくれ、身の安全を守りましょう。
とにかく、頭を保護することが大切です。丈夫なテーブルなどの下へ逃げ込んで、頭は、テーブルから離してその脚をしっかり押さえ、落下物から身の安全を守りましょう。トイレや風呂場など、狭くて柱の多い場所が比較的安全です。

外を歩いていた

外を歩いているときに、ゆれが来たら、看板やガラスが落ちてくることに注意し、かばんなどで頭を守りながら公園や広場にひなんしましょう。
揺れがおさまったら近くの公園や広場、丈夫なビルなどがある場合は、そこへ避難しましょう。
落下物の危険がない場所でも、古い木造の建物やビルの壁際などには近づかないようにしましょう。海岸付近では、津波の危険があります。海岸からはなれてできるだけ高台や高い建物等に避難しましょう。

すぐに飛び出さない

家の中にいて地震（じしん）が起きた場合、ゆれがおさまってもすぐに飛び出すと、屋根のかわらや、ガラスなどが落ちたり、ブロックへいがたおれるなどのきけん性があります。
家の中にいた場合、最初の揺れがおさまっても、すぐに外へ飛び出さないのが原則です。周囲の状況をよく確かめて、落ち着いて行動しましょう。
外に飛び出したとたんに、屋根瓦が落ちる、ブロック塀が倒れるなど、家の周囲の危険にさらされるかもしれないからです。

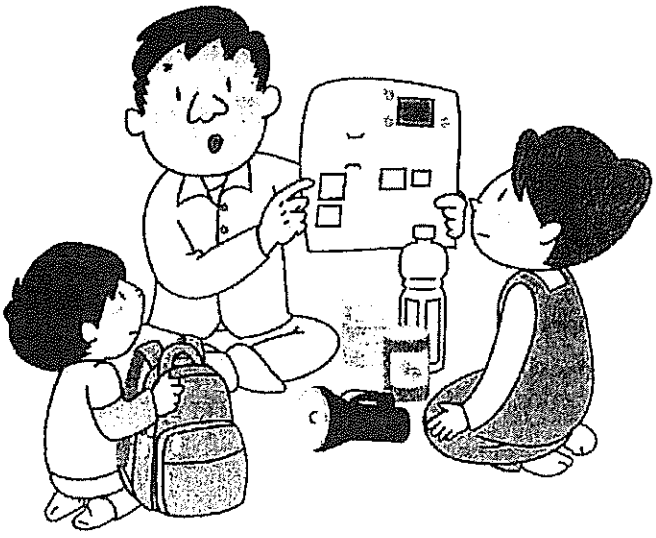
家の中の転倒物に注意
家の中にいて地震（じしん）が起きた場合、家具がたおれて下じきになったり、たおれた家具で部屋のようすが変わり、いつものように歩けなくなったりするきけんがあります。

古い倒壊しやすい建物、危険物のある建物に注意
家にいて地震（じしん）が起きたとき、家が古いとつぶれるきけん性もあるので、様子を見てすぐに逃げださなければいけないこともあります。また外にいる時は、こわれそうな家、ばく発のきけんがありそうな場所に近づかないようにしましょう。
可燃性、引火性のあるガスや薬品、塗料などを扱っている店や工場などの建物にも、爆発の危険性があるので近寄らないようにしましょう。

切れた電線や、ブロック塀倒壊に注意
地震（じしん）や台風のあとなど、電線が切れてたれ下がっていたり、一見じょうぶそうに見えるブロックべいがたおれてきたりするばあいがあります。
うっかりと触ると感電の危険性があり、感電死することもありえます。切れた電線には近づかないように注意しましょう。

津波に注意
強い地震（じしん）や弱くても長いゆっくりしたゆれを感じたら、津波（つなみ）のおそれがあります。ゆれを感じなくてもテレビやラジオの津波情報に注意し、けい報が出たらすぐに海岸からはなれて少しでも高いところにひなんしましょう。
地震が発生すると 2～3 分程度でテレビ･ラジオから津波情報が放送されます。なお、津波警報の場合は大阪市でも同報無線などを活用して伝達します。
強い地震（震度 4 程度以上）を感じた時、又は弱い地震でも長い時間ゆっくりとした揺れを感じた時は、すぐに海辺から離れ、少しでも高い場所に避難しましょう。
津波は繰り返し襲ってくるので、警報、注意報が解除されるまで気を緩めないでください

防災会議をする
・災害の時にはどこに避難し、どうして連らくを取り合い、離れた時にはどこで落ち合うかなどを話し合って約束事を決めておく。

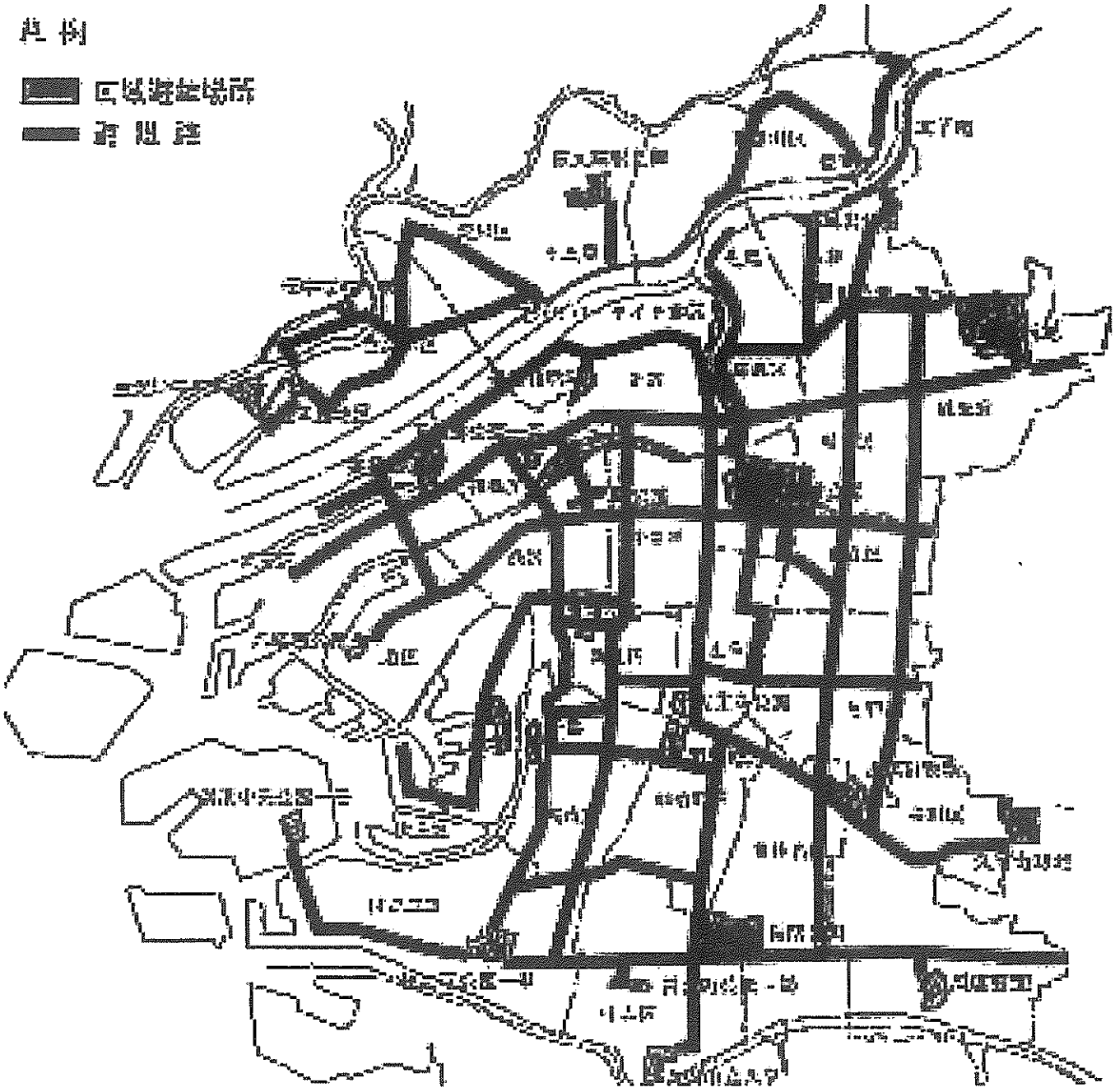


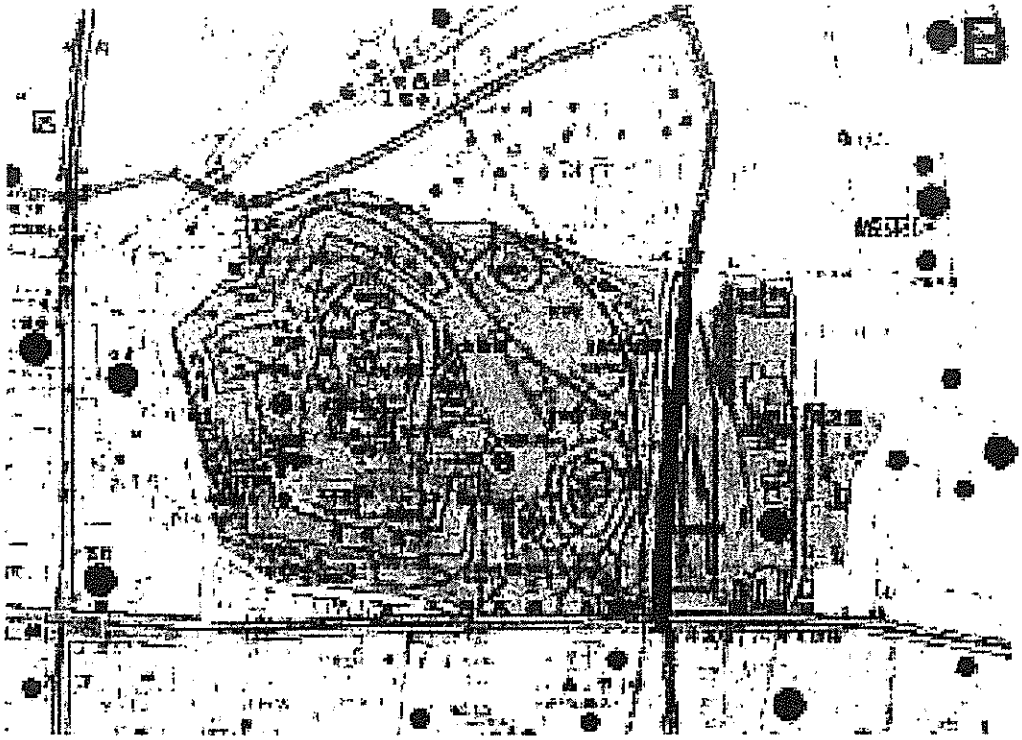
●避難場所や落ち合う場所
【実際に避難場所まで歩いて道順を覚えさせておく。離れている時やバラバラになった時には、どこで落ち合うのか決めておく】
●安否確認の方法
【連絡方法を決めておく。避難する時は施設に避難先などの張り紙をし、安否を確認するルールを決めておく。】
●避難出口の確保
【火災が発生してしまった場合、避難経路が一方向だけでは炎や煙で避難できなくなってしまうおそれがあるため、室内で二方向の避難出口を確保出来るようにしておく。】

どこに避難（ひなん）するのか

・災害の時にどこに避難するかは、学校や公園や広大な公園などが「ひなん所」として住んでいる場所ごとに指定されています。

・安全を確保するための公園などの広場を「一時避難所」、学校など給食設備を有する施設を「収容避難所」、地震により同時多発火災が発生した場合などのために、広大な公園などを「広域避難場所」として指定されている。近くにどのような避難所が指定されているかを日頃から注意して確認しておく。





避難経路の確認

・災害の時に指定された避難場所まで行くには、どこを通ればよいかを知り災害時の危険も考えながら実際に歩いてみよう。

・広域避難場所への避難路は、安全な道路があらかじめ指定されている。

・一時避難所や収容避難所へのルートは、災害時には通れなくなっているなど日常では考えられない状況が起きている可能性もあるので、災害時を想定して実際に歩いてみることも有効。防災会議などでその経路を家族全員で確かめ、また一つのルートがダメなときに備えて 2 つ以上のルートを選んでおきましょう。

施設の周囲の安全

・建物は丈夫でも、かん板や自動販売機、コンクリートブロック塀など、家の周りに地震の時に危険なものはないかを考えておくことは重要。

・例えば、普段は何気なく見ている看板も、地震の時には落下してくるかもしれません。動くはずがないと思っている自動販売機が倒れてくることも考えられる。

・コンクリートのブロック塀は丈夫で安全そうに思えるが、施工がしっかり行われていないと、地震の時には倒れて極めて危険。家屋そのものが大丈夫でも、ブロック塀が崩れるとその下敷きになる可能性もあり、正しく作られているかの点検、補強などの対策が必要。

【地域と共に】

地域の情報を知っておく

・災害の時に自分や施設を含む地域全体の安全の為、自分の事だけでなく地域の事を知っておくことは大切なことです。

・非常時に急に協力体制を作るのは難しい為、地域で行なわれる防災訓練はじめ、その他様々な行事･催事などにも積極的に参加し、日頃から地域についての情報を持っておくようにする。

第４章

保育に取り入れられる（子どもと行える）災害への備えについて考える

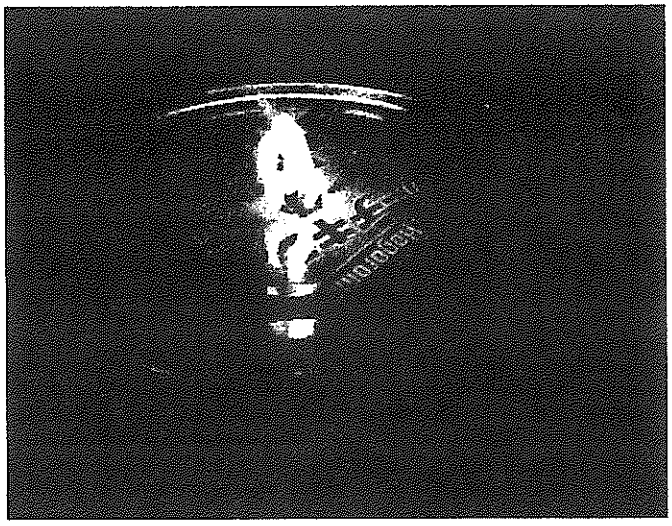
・上記のように学校からの登所経路を子ども達と確認したり等の備え以外に何が出来るのかを話し合う。

・小学生にとって災害について危機感を持ち“怖い”と感じる事・いつか自分の身に起こるかもしれないと当事者としての意識を持ち、与えられた情報ばかりではなく自身で考えていく事が出来るようになる事が大切だと討議した。

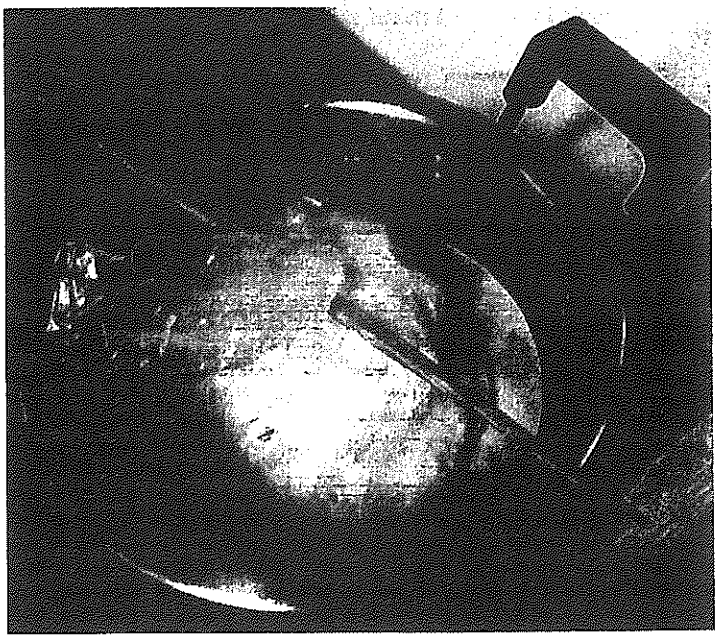
・“危機感”を感じる事ももちろん大切であるが、災害という先に起こるかもしれない非日常に子ども達が「そういえばこんな事したな」と記憶に残り役立つ事は何か、更にそれが保育という遊び・生活の場で取り入れられるような事はないか検討し、非常食を作ってみたり、クラフトとして防災グッズを作成する。

災害時に役立つ食べ物

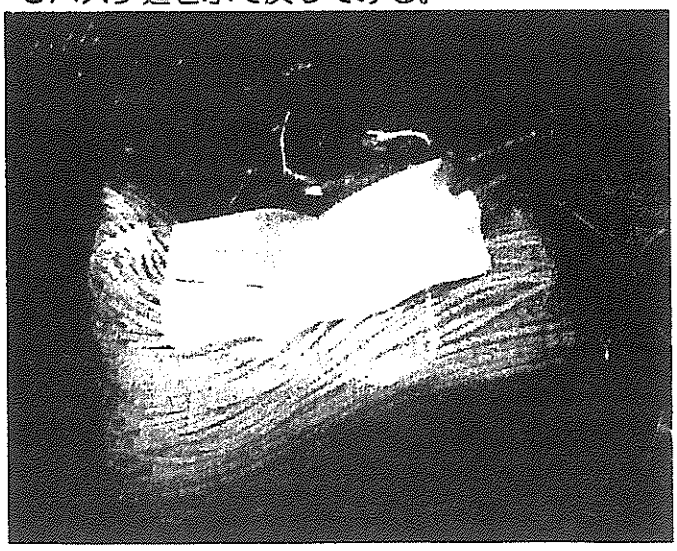
●オイルの缶詰に穴をあけ、ティッシュをオイルに浸して火をつける



●ビニール袋で白飯作り
（水の節約・洗い物の軽減）



●パスタ麺を水で戻してみる。



ガスや電気、水道などのライフラインが止まった際に出来る方法について、様々な方法があると知ったが、事前に情報を得ておかないと災害時に役立てられない。
情報を得て子ども達と保育の中で取り入れられるものを知っておく。

第５章

災害シュミレーションについて

・目黒巻を用いてイメージトレーニングをし、施設を越えて話し合う中で新たな視点や方法を得られるように行う。

・自身の考えや価値観を再認識し自身の防災力を高め、その後の防災対策に役立てられるように行う。

【目黒巻を実践】

15：30

地震発生

木造の建物が倒れるくらいの震度

地震

震度：　６強

〈発生〉
季節：　冬
天候：　小雨
曜日：　火曜日
時刻：　15:30

あなたの状況は？

あなた：　学童指導員

施設状況：

１～6　年生が順次子ども達だけで登所

地震発生時の状況

子どもが小学校から順次学童（保育園）に帰って来ている状況。まだ登所予定の子全員が帰って来ておらず、道中にいるもしくは小学校内にいると思われる。

近隣捜索側

※近い所から探していくか、危険な場所と思われるところか探していくか？

決まった下校道を通っているとは限らない近くに困っている人がいたら立ち止まったり手助けする子もいる可能性がある。

※“子どもがいる場所の近くの公園”が安全かどうかの判断は出来るのか？

避難側

※救助を求めている方・泣いている子どもがいたらどう対応するか？

※一時避難所・広域避難所に到着した際、学校単位・地区単位で子どもの安全確認がされているのか？一人で非難してきた子がどこで安心を得て保護者を待てるのかが疑問。

近隣捜索側

※下校道で災害にあった場合、危険な物を知らせているが色々な想定が考えられる。子ども達にこうしたら安全だと伝えられていない。

危険と共に安全と、その安全も確実な物ばかりではなく場合によっては危険に変化するという事をどう伝えていくか。

当日夜

※明るさや（雨で濡れている・冬のため）暖の確保などの為、避難所にある備蓄だけでは足りない可能性。そういった場合は施設に（懐中電灯・毛布、着替え、タオルなど）取りに行く。

※保護者が子どもを引き取りに来られない場合、いつまで施設（職員）が見守るのか？

電線が切れ、電話・水道やガス、水道等が使用不可となる。
信号が機能しない為、道路の車も混乱し、救急・消防等の緊急車両が通れない

15：30

地震発生

揺れの最中

揺れが収まる

棚の中にあるものが落下
固定されていない家具が倒れ、蛍光灯・窓ガラスが割れ飛散する。
姿勢を低くし、近くの机などの下に避難。頭を守るよう声を掛け自身も安全体制をとる。
ドアや窓を開け避難出口の確保、火の元の確認を行う。

直後

子ども達を室内の落下物の恐れのない場所に集め人数確認を行う。
泣いている子・動揺している子の気持ちを励ましながら他クラスと連携して園庭に避難する。
各小学校や保護者に下校状況の確認を取るが電話が繋がらない為出来ない。

数分後

一時避難所（小学校）もしくは災害時広域避難所（公園）へ施設ごとに避難する。

避難側
施設に避難場所の張り紙をする。メールを使用している場合は一斉送信。
負傷者がいる場合、その対応職員と避難誘導職員とに分かれる。
道中、落下物の危険が無いか上方に気をつけながら、子どもを励ましながら誘導する
※小雨が降っているが人分の雨具の確保は？

登所していない子の安全を確認する為、指導員数人の内、保育園と共に学童児を連れて避難する職員と、通学路・小学校にいる子どもの安全を確認し、場合に応じて施設が避難している場所へ誘導する。

数時間後

翌日

避難所に不足しているものを施設職員や近隣住民の方と施設に取りに行く。
個人で動くというよりは施設・地域の方と子どもやその場にいる方々にとって何が必要か話し合う機会が必要。
その後続く余震や子ども達の心の痛みをどう和らげられるのか、その場にいる大人で話し合い、出来る余裕を持って過ごせるように。

数週間後

数か月後

避難所生活がまだ続く中、主に大人は日中、建物の復旧作業や食事の炊き出しを行っている。医療関係者は避難所内の高齢や体調不良の方の対応をしたり、役所の方が避難所内の整備等に尽力されている。
※そんな中、保育士・学童指導員として何ができ、またそこへの心構えは？

※小雨が降っているが人分の雨具の確保は？
→災害時に濡れる事の心配よりもまずは安全な場所への避難を優先した方が良いという意見と、避難所が混雑している・公園の場合、長時間外で過ごすかもしれない、その先の避難生活を鑑み、すぐに病院等に行けないかもしれないので雨具が必要という意見。

※救助を求めている方・泣いている子どもがいたらどう対応するか？
子どもと避難している場合子どもの誘導に余裕があれば男性職員が救助に当たるかも？子どもが泣いている場合には手を引いて一緒に避難場所まで連れて行く。
近隣捜索の場合近くにいる避難途中の大人に声を掛け救助活動に参加するという意見と、救助活動を呼び掛け、自分はすぐに子ども捜索に戻るという意見があった。子どもが泣いている場合も、その対応をするという意見と避難途中の大人に任せ捜索するという意見に分かれた。

※一時避難所・広域避難所に到着した際、学校単位・地区単位で子どもの安全確認がされているのか？一人で非難してきた子がどこで安心を得て保護者を待てるのかが疑問。
保育園と共に避難した子と、小学校で避難した子（学童在籍児）がいると考えられ、迎えに来た保護者や子ども達が混乱しないよう、災害後すぐの避難所ではどこに誰がいるか分かるよう、また子ども達が安心して“ここに居たら安心だ、保護者が見つけてくれる”と思えるような対応がされているのか。学校単位や町内会（地区）単位で居場所が確保されていたら分かりやすいかなと意見が挙がった。

※捜索の際近い所から探していくか、危険な場所と思われるところか探していくか？
近隣や危険と思われる場所、小学校付近や下校道と違う所にいるかもしれないと予測し、創作するだろう。避難誘導と捜索に分かれる際に、避難誘導に学童指導員が着く必要性が高い場合、余裕のあるクラスや調理室さん・事務の方に捜索に行っていただくとなった場合どこまで探して頂けるのか？学童指導員も地域の隅々まで熟知しているわけではない。こういった事も想定し、指導員だけの意識ではなく地域福祉施設として施設内にいる職員と共に、今後さらに地域を知るという事を共有しておかないといけないなと意見が挙がった。

※“子どもがいる場所の近くの公園”が安全かどうかの判断は出来るのか？
※下校道で災害にあった場合、危険な物を知らせているが色々な想定が考えられるのでこうしたら安全だと伝えられていない。
下校時に災害にあった場合、子ども達が自分の判断で行動しないといけない。事前に与えておいてあげたい知識以外にも自己判断が必要・難しい場面が多々あるのだろうと考えられる。例えば、下校時に災害にあった場合「近くの公園に行けば良いよ」との判断をしてしまうと、その公園が避難所にはふさわしくない（高架下など）かもしれない。困った時、悩んだ時、また自身での判断では「こうだ」と思っていたとしても、周りの大人たちがどう動いているのかを見て、その流れに乗って行動する事や聞く事で身の安全の可能性が高まるのかもしれない。津波など子ども達の想像を超えてくる事象もある。事前に危険を全て伝える事は難しいが、対処法や安全・身を守る術も伝え子ども達の判断材料の礎になれば良いなと討議を行った。

※保護者が子どもを引き取りに来られない場合、いつまで施設（職員）が見守るのか？
保護者が避難所までたどり着けない、その後どうなるのか。保護者の安否確認はどう対応するか？

※保育士・学童指導員としてどう動きますか？

避難所生活が続く中、水道・電気等のワイフラインが止まっている。避難所にいる大人は日中、建物の復旧作業や食事の炊き出し、医療関係者は避難所内の高齢や体調不良の方の対応をしたり、役所の方が避難所内の整備等に尽力されている。日を増すごとに余震が減り、比例して子ども達も落ち着いている中、一部の子たちにはまだ不安が色濃く残っている様子がある。

体育館は避難所に、校庭は炊き出しや車輛スペースになり、広く使用できる場所は見当たらない。その中で子ども達は運動不足とストレスや退屈を持て余し、ふざけたり暴れ始める姿が見られるようになってきた。その姿に体調不良で休まれている方やその家族が嫌な顔をし「静かにして」と伝える事もあり子ども達は居心地が悪そうにしている。

保育士・学童指導員としてどう動きますか？

子どもの生活を見守り遊びを提供するプロとして、何が出来るか？

信念を持って何を訴えていくか？（地域の子ども研究会スタッフの声）

小学生なら一緒に炊き出しに誘ったりする。遊んでたら「なんで大人が遊んでんねん」って思われそう

力仕事に行ってそう。そっちの方が活躍出来そうな気がする

施設が活用できそうな状況なら子ども（乳児・幼児・学童児）を受け入れてその分保護者に復旧作業とか動ける所に行ってもらう。

施設の近くに避難していたら、知っている子も多いし子ども達の事も良くわかってるけど、地元（知っている子がいない状況）だと、子どもと関わる…というよりは復旧作業や炊き出しなど出来る所に行くと思う。

施設の近くだったら、子どもと関わりながらおそらくOBOGも沢山いるので小学生たちと関わる役割をしてもらうと思う。しんどい子にはもちろん大人が、でも回復しつつある子には中高生とかと関わる中でストレスとか解消されるかな。

「なんで遊んでんねん」っていう大人がおると思うけど、子どもにとっていつでも遊ぶ事って大切。子どもの意見を言える大人になりたい

阪神淡路大震災の時
"（日時）から遊べるよ"と掲示すると徐々に子どもが集まるようになった。保護者がその場へ送り出してくれるようになり、賛同した大人（被災者の方）が手伝いに来てくれるようになった。そうなるとVOの役割は無くなり、地元の方々で子ども達を見守る体制が出来る。
自分たちには場をコーディネイトする役割が出来るのではないか。

自分が被災した時、何も考えられない状況ではないか？こうしないといけないと思っても実際に動ける状況なのか。

第６章　考察

本研究のねらいとして、災害を子ども達に“脅かす”のではなく“知識を得て伝え、共に考える”、災害後の私たちの出来る事・力を発揮すべき役割は何かを事前に考えておく事とした。

各施設での避難訓練・備蓄などの取り組みや、それに対しての子ども研究会スタッフ意見を聞き取ると、“小学生に対して”という点で、危機感と事前に準備・子ども達へ存分に発信していく必要性を感じるという声が多く上がった。乳児・幼児と違い、“大人が傍に居ない事がある”という点では子ども達自身が危機感を感じ、判断をし、身の安全を確保するという非日常を、普段見守っている私たち職員がどこまで意識し、子ども達に伝えていくのかという難しさ、子ども達の命を守る為の必要な知識をまだまだ大人自身が知らないと感じる事が多くあった。

その中で、“脅かすのではなく、知識を得る”とした事のねらいは、普段の遊びや生活の中で、防災・減災、災害後に役立つ知識を（大人は意識しながらも）子ども達は楽しみながら取り入れる事で、いざという時に何か一つでも思いだし、気持ちに余裕が生まれる事を願ってであった。そうした意味でも研究活動内では、今までの災害事例ばかりを検討するのではなく、子ども達と生活の中で取り入れられるよう、非常食を実際に作って試食してみたり、防災グッズなどを調べて作ってみたりを行ってきた。こうした活動を、“特別な事”ではなく“普段の生活の中”で取り入れ日常化できれば、“避難訓練”に捉われず普段の公園での活動や登下校時に自然と意識出来る事が小学生との防災に一歩前進となるのではないかと討議した。危険・安全安心、その安全がいつでも確実ではない事、そうした子ども達自身の判断材料の礎になるよう、大人がどういった知識を得て伝えていくか、これからの実践で更に地域の特徴を知り考えていく必要を感じた。

子ども達と共に被災した当事者として、しかし地域福祉施設職員従事者としてシュミレーションをしていく中で、個人として・施設として・地域の１つとしての施設の役割として、今の活動に何が足りていないのかぼんやりと見えてきた気がする。今までは何が足りていないのかさえも分からなかったが、シュミレーションの中で「これは先に考えといた方が良いよな」という事が大いにあった。個人で出来る事、施設へ還す事、施設と共に地域住民の方々とどういった事が出来るのか、今後研究活動の還元に繋げていきたい。

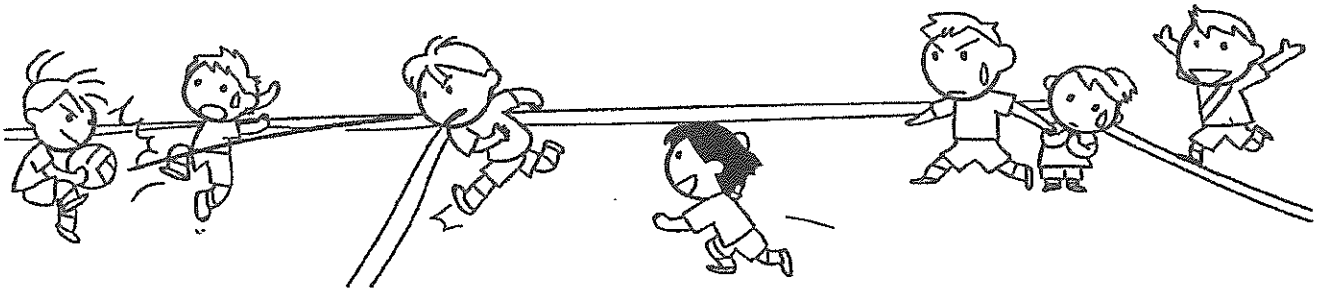
研究会スタッフでのディスカッションでは、「レジリデンス（逆境に耐える力）。何かを立ち上げるのには物凄いエネルギーがいる。（自分も被災している中で１から何かを考えられるのか）」という意見があった。冷静な時に“子どもには遊びが大切”と分かっていても、被災した時に“こんな時に遊ぶなんて”と思う大人たちが存在した時に、信念を持って「子どもが遊ぶ重要性」を訴える大人になれるのか。その一点が本研究に至る原点であったが、「どんな状況でも信念を持って周りに発信し、理解してもらえるよう（理論や気持ちの）準備をしていく事」「子どもの意見を言える大人になりたい」と討議した中で力を頂き、「自分に（自分たちにしか）出来ない役割は何なのかを知っておく事」「周りを巻き込んで出来る事がある」「場をコーディネイトする役割が出来るのではないか」との言葉に視野の広がりを感じる事が出来た。

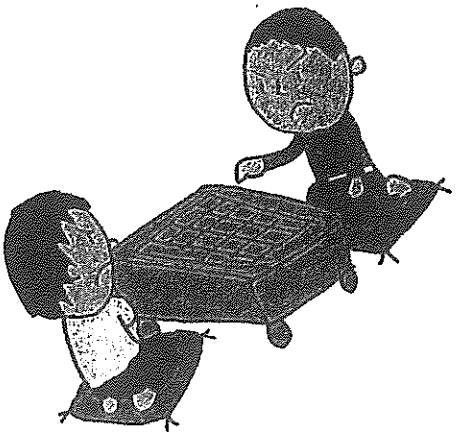
本研究をここで終わらせず、子ども達と共に日々考えていきたいと感じた。

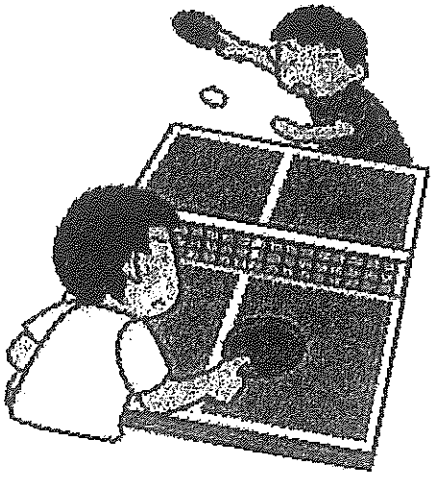
研究活動メンバー

阿さひ保育園つくし会	吉野	裕志
四貫島友隣館子どもの家	荻野	遥馬
長居子どもの家	米田	江里
望之門学童クラブ	大西	奈々子

子どもとの活動・行事報告







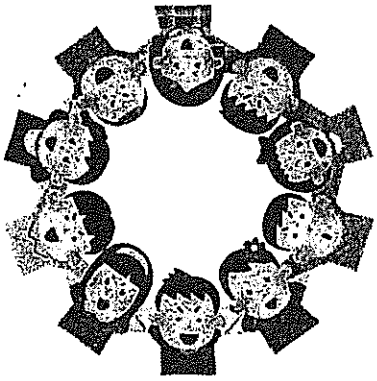
２０１８年度「子どもとの活動」について

文責：やまと保育園子どもの家
丸尾　咲貴

研究会では、年間を通して行事を含む（ともだちドッジボール・ともだちフェスティバル等）子どもとの活動を考えるグループがあります。その中で、今年は「出会い・知り・繋がろう」というテーマを掲げ、合同行事を通して、子ども達が主体的に繋がりを感じる事を目指して活動に取り組んできました。

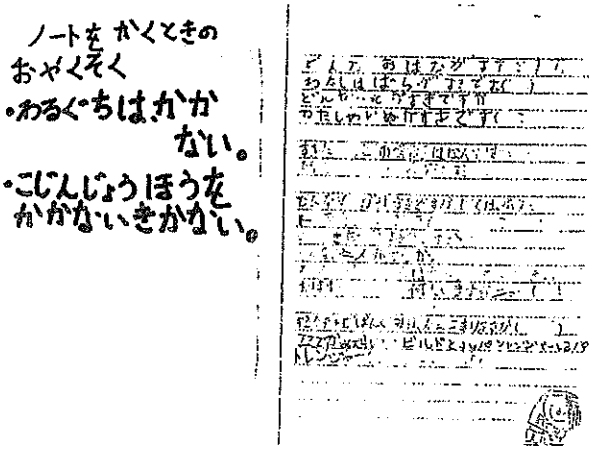
しかし、これまでは行事が終わってしまうとなかなか繋がりが持続することが難しく、また行事当日までも、他施設との交流ができていない事がありました。そこで、行事の前に他施設の友達を知るきっかけ作りに「施設合同新聞」の発行と「交換ノート」という形で行事の前に書面で他施設の事を知り、行事当日に出会い・繋がれることを意図として、取り組みました。夏休み終了の９月から活動を始め、１１月のともだちフェスティバルを視野に入れながら発刊をしました。

新聞の内容は、自施設の紹介や流行っている遊び・またフェスティバルのイベントにむけて、各施設のゆるキャラの紹介などがありました。その結果、「施設の名前は知っていたけど場所は知らんかったわ～」「こんな遊びが流行ってるんやな～」「僕らも記録対決やってみようや！！」と毎月の合同新聞の発刊を楽しみにしている姿や、行事当日には、「あ。新聞に載ってた施設や！ちょっと遊びに行ってみようかな～」と子ども同士を繋ぐきっかけにもなりました。「交換ノート」も同様に、質問コーナやノートが返ってくることに自分の書いた質問に返事が返ってくることの嬉しさなど味わえることができたと思います。こうした取り組みを継続することで、合同行事以外でも子ども同士の繋がりを大切にすることができたらと思います。



そして、今の時代の子ども達にはどんな課題があり何を必要としているのか？そこをきっちりと、指導員間で話合いながら、今後も行事について子どもたちと一緒に考えていきたいと思います。

☆交換ノート☆



☆施設合同新聞☆

２０１８年度子ども将棋大会

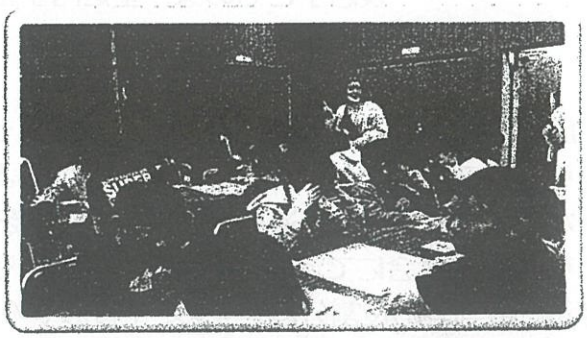
○平成３１年１月１２日（土）　育徳園早川記念ホール

参加施設：愛染橋児童館　今池こどもの家　育徳園子どもの家　長居子どもの家
望之門学童クラブ　平和の子子どもの家

参加人数：約９０名

内　　容：名人リーグ（上級者）金リーグ（中級者）銀リーグ（初心者）
団体戦（金・銀の選手５名）
金・銀リーグの予選敗者トーナメント＋と金リーグ（練習対局）
指導棋士による６面指し　　将棋ものしりクイズ

感　　想：自分の実力を試せる、色々な子と将棋できると、わくわくした様子の子ども達。しかし対局が始まると集中し、緊張感がこちらまで伝わるほどでした。自信や喜び、悔しさなどを感じたと思います。この一日が子ども達の成長に繋がる事を願っています。



2018年度子ども卓球大会

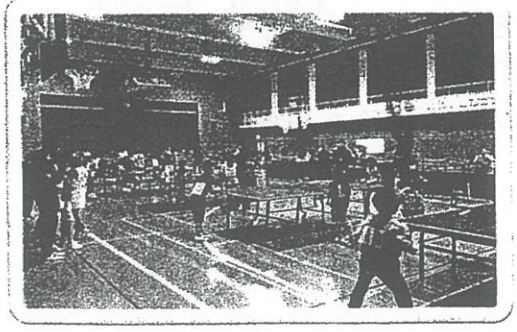
○平成３０年１１月２５日（日）　昭和中学校体育館

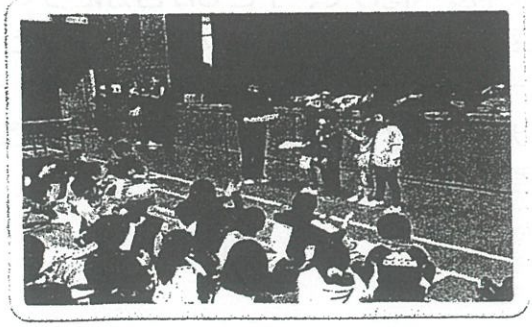
参加施設：育徳園子どもの家　愛染橋児童館　長居子どもの家　今池子どもの家
望之門学童クラブ　西淀川中学校　やまと保育園子どもの家　都島児童館

参加人数：約９０名

内　　容：（午前）各学年によるリーグ戦
（午後）午前リーグを順位別に再度分けてのリーグ戦

感　　想：卓球界では今、若い世代の活躍が目立ちます。この大会での経験を糧に未来に羽ばたき、新しい時代を作る子ども達になってほしいと思います。





第33回ともだちドッジボール大会

育徳園子どもの家
隈元　まひる

《日　時》2018年　5月27日（日）9:30～15:30
《場　所》長居小学校グランド・体育館
《参加人数》小学生242名　中高生21名
《参加施設》愛染橋児童館学童クラブ、阿さひ保育園つくし会、育徳園子どもの家、
今池こどもの家、今川学園子どもの家、四貫島友隣館子どもの家、
長居子どもの家、望之門学童クラブ、平和の子子どもの家、
やまと保育園子どもの家、　計10施設

施設対抗戦から複数施設合同チームを作っての対戦へと変わって4回目を迎え、さらに少しでも子どもたちが作っていく大会にしようと「子どもも大人も主体的に出会い、知り、繋がろう」をねらいに進めてきた。ねらいを受け、研究会ではどうすれば子どもたちが自分たちで作る大会にできるだろうと話し合いを持ち、5・6年生の部では自分たちでチームを作る、審判等の役割分担をする、午後はやりたいことを子どもたちが決め進めるという初めての取り組みを行った。大会前は審判をすることへの不安なども聞かれたが、チーム決めからはじまり、それぞれに相談して役割分担を決めるなど5・6年生ならではの様子が見られた。それを見ていた3・4年生からは「審判やってみたい」「ボール拾いならできる」等の声が聞かれた。

大会当日は晴天に恵まれ強い日差しの中での開催となり、1年生は体育館での対戦となった。体育館での対戦は体力面を考慮するとよかったのだが、2年生以上の試合の応援になかなかいけなかった等の反省もあり、来年度に工夫していきたい。

大会後には子どもたちにアンケートを行い、現在の大会に対する思いや考えを聞く。勝ててうれしかった・強いボールが受けれてうれしい等の声が多かったとともに、こんなルールを作ってほしい等の声もたくさん上がってきた。また5・6年生からはチーム決めに大人が入ってしまったことへの不満がきかれた。

来年度へ向けて、子どもが自分たちで考え、作り出すことのできる大会へとさらに発展させていくために、子どもたちのアンケートをどのように活かしていくのか、5・6年生の部への取り組みを見直すとともに、下の学年でもできることはないのか踏まえて考え、繋げていきたい。

ともだちフェスティバル

文責：平和の子子どもの家　岡村　慎一

【日　　時】　２０１８年１１月１８日（日）
【場　　所】　長居公園（自由広場）
【参加施設】　９施設（愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会
育徳園子どもの家・今池子どもの家・長居子どもの家
今川学園子どもの家・望之門学童クラブ
平和の子子どもの家・やまと保育園子どもの家）

【参加人数】　小学生１７２名　＋　中高生ボランティア１３名

〈大会のねらい〉
・楽しく参加しながら**交流**（他施設のともだちと関わる、他施設を知る
・OB とのつながり、指導員同士、地域との関わり）する。

今回のともだちフェスティバルでは、各施設のカラーを視覚的に表現し、知ってもらう目的として「ゆるキャラ」作りを夏休みから取組みました。

当日は、子どもたちに扮装してもらい、ダンスイベントを行いました。また、施設対抗としてペットボトルロケットや大縄跳びも行い、盛り上がりました。この行事では、ドッジボールの様な明確な目的が無い為、どうしてもイメージが湧きにくく、参加率が下がってしまいます。

しかし、その分自由度が高いので、子どもたちの声を聞きながら、楽しく、参加しやすい行事としていく為に、指導員同士で意見を出し合いながら今後進めていきたいと思います。

今年は各ブースについてそれぞれの施設で内容を考えてきましたが、全てのブースを全員で丁寧に検討していきたかったと来年への課題が出ています。また、“交流”と大会のねらいに掲げましたが、交流は狙って行うものではなく子どもたちの中で自然と生まれるものだという意見が出ました。まずは子どもたちの中に具体的なイメージが湧き、楽しみになるような枠組みを作り、全ての中身について、みんなで話し合ってより良いものにしていくことが次への課題です。

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

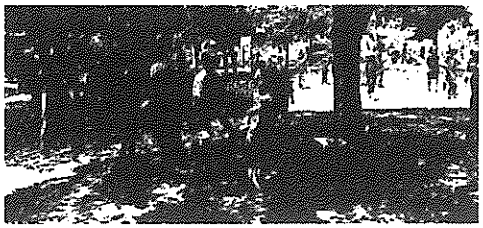
★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

子どもたちがここで経験したこと、出会った友だちとの関わりから少しでも新しい自分の発見となり、成長していくことを願っています。

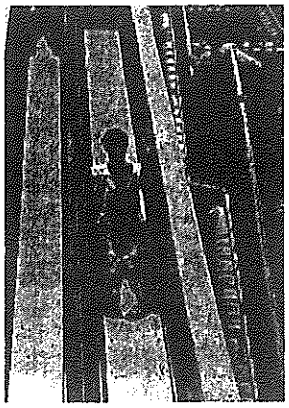
長居公園

合同遠足

今池こどもの家　多賀井潤一郎



地域の子ども研究会主催で実施している年間２度の全施設合同行事で施設間交流の意義を見出し、施設の垣根を越えた交流を毎年いくつか実施しています。その代表的な行事が合同遠足です。他地域に居る同じ年代の子ども同士が更なる繋がりの機会をもち、顔の繋がりがもてるようになれば、もっともっと楽しみが増えるかも知れない。そういう考えのもとで始まった合同遠足を今年度も開催しました。

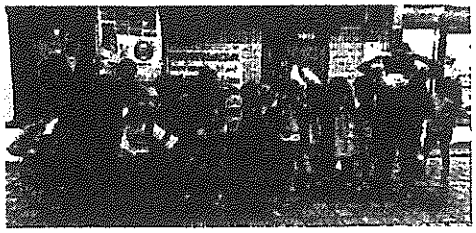


今年度は天候の都合もあり、一度しか実施できませんでしたが、この一度きりの開催でも大きな収穫がありました。子どもたちの声を拾ってみると、

『前のともだちフェスティバルで、うちの店をてつだってくれたよな～。』
『次のドッジボール大会で同じチームになれたらイイな～。』
『また、鬼ごっこの続きやろうな。約束やで！！』

など、参加した子どもたちは３時間程度の交流の中で、親しみをもって他施設の仲間と言葉を交わしている姿が随所で見られました。日頃は交流する機会が少ない引率の職員同士もここぞとばかりに情報交換をする様子があり、日常の遊びや遠足の行き先についての情報を得る経験ができました。

『うちの施設の子たちは内弁慶で、自分の施設だけで鬼ごっこをしるんです。せっかくやから、一緒に遊びや～。って声を掛けたんですけど、ぜんぜん馴染めませんわ～！』



という引率職員の声が交流の序盤にありました。児童福祉の父と呼ばれた歴史上の福祉先覚者 石井十次が提唱した「実行主義」にもあるように、子どもは（大人が）言うようにはせず、（大人が）するようにするものです。その後、指導員同士が連携し施設の垣根を越えて一緒に鬼ごっこに参加することで自然と複数施設の子どもたちが入り混じっての鬼ごっこ大会に発展していました。気付けば、子どもも大人もヘトヘトになるまで遊び、楽しい時間を過ごすことができました。とても良い手応えがあったので来年はどんな企画を提案しようか、新しい出逢いが今から楽しみです。

◆実 施 日：6月16日（土）
◆行 き 先：扇町公園
◆参加人数：１４９名【子ども１３１名　職員１８名】
◆参加施設：阿さひ保育園つくし会・今川学園子どもの家・今池こどもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・やまと保育園子どもの家　【６施設】
◆主な遊び：鬼ごっこ、滑り台、ドッジビー、野球、大縄跳び、ボール投げ、サッカーなど

琵琶湖セツルの家　ワーク

□日時　7月1日（日）

□参加人数

小学生	中学生	大人	合計
２１名	１２名	２６名	５９名

□作業内容

- 倉庫、台所の整理
- 草刈り
- 浜掃除
- 薪縛り
- 飛び込み台整備
- 布団干しなど

□昼食

□午後から作業、湖水浴

今年度は、職員に混ざり OB，学童の６年生も一緒に作業を行いました。６年生は誰よりも早く「セツルの家」に行ける事を楽しみにしている様子でした。「セツルの家」に到着すると、子どもたちひとりひとりが、夏のキャンプの思い出を、友だちと楽しそうに話し、会話も弾んでいました。ワークではＯＢや大人の作業を“見よう見まね”で挑戦している姿や浜に打ち上げられた大きな石、ガラス、ゴミを拾う作業、飛び込み台の板を磨く作業、薪を分ける等、分担して作業を行っていました。今年度の夏のキャンプを思い思いに描きながら施設を越えて皆と一緒に協力して取り組む子どもたちの姿が見られました。おやつ（休憩）の時には“カキ氷”が振舞われ美味しそうに食べていた子どもたちでした！！午後からの湖水浴も楽しみのひとつ！！大人が見守る中で自由に泳ぎ、他施設の子どもたちと譲り合いながら飛び込みを楽しんでいました。安心できる大人との関わりや子ども同士の交流、自然体験など子どもたちにとって良い経験になり、心の栄養になったのではないかと感じました。

「情報交換」について

文責：長居子どもの家
米田　江里

情報交換の目的

・学童期の子どもたちと関わる指導員同士、日々の現場での悩みなどを意見交換・活動公開・ケース検討という形で共有し、即実践に活かせるように、個々の視野を広がりやスキルアップへ繋げるために行う。

今年度情報交換で話し合った内容（一部抜粋）

・室内あそび（雨の日など）　・新１年への関わり　・各学年のみのイベント
・学童のルール（普段・長期休み・薬の取り扱いなど）　・夏休みのイベント
・地震時の対応　・台風について　・保護者との連携、対応　・学校との連携
・地域の役割、連携　・怪我の対応　など
【あそび公開】パズル対決、紙飛行機、漢字タイムアタック「車」

情報交換年間計画と途中変更について

今年度は年度初めに、共有したいテーマと話し合いたい時期を書き出してもらい、年間計画を作成した。テーマに応じて全体・グループに分かれて少人数でと討議し共有する方法で毎回 10 分程度時間を作り実施した。

基本的には年間計画で決めたテーマを話し合ったが、６月には大阪地震後の各施設の対応について、９月には台風２１号に伴っての台風の前日～当日の対応について情報交換する等柔軟に変更する事もあった。

年度初めにテーマを出し合った事で、２学期・３学期には書き出したテーマ（悩んでいた・困っていた事）が解決済み・他に聞きたい事が出てくるなどの課題が見え、２学期後半より年間計画を一度白紙に戻し、聞きたい事がある場合は回毎に発信してもらう様声を掛けた。更に個人の悩みの共有ばかりではなく、各施設の遊びやスタッフの持つ遊びの展開のさせ方などを公開し知る事で、個々の視野の広がり・スキルアップ、即実践に繋がるのではないかと、あそび公開という形での情報交換を試みた。

今年度振り返り・次年度の課題

柔軟にテーマ内容を変更し話し合う事が出来、スタッフの悩んでいる事を悩んでいる時に議題として取り上げ共有し意見交換をするなど、有効に時間を使えた部分は多かったように感じている。また、今年度は話し合いだけでなくあそび公開を取り入れる事で、スタッフが他スタッフに遊びを公開するために意見を出し合い、各施設に還元できたのではないかと思う。

今年度は研究会参加１年目のスタッフもおらず、聞きやすい雰囲気の中で悩み等を回毎に発信しやすい環境にあったと思う。しかし次年度以降、新しいスタッフを迎えた際に今年度と同じように各スタッフの悩みの添った情報交換が出来るかどうかは課題がある。年度毎にどういった方法で進めていく事が望ましいか担当スタッフで模索してほしいと思う。

★今年度情報交換で話し合った内容（取り組み）

日時	場所	テーマ
4／27	望	あそび・室内あそび（雨の日など）
5／11	育徳	低学年・高学年のつなぎ方・新１年への関わり
5／18	今池	学童のルール（普段・長期休み・薬の取り扱いなど）
5／25	長居	各学年のみのイベント
6／8	やまと	クッキング（おやつ・昼食づくり）
6／22	今川	工作➡地震時の対応
7／6	都島	夏休みのイベント
7／13	平和	キャンプの活動（メニュー・クラフト・ねらい・場所）
9／14	四貫島	２学期の行事について（内容）➡台風について
9／21	なみよけ	２学期の行事について（学童の関わり方）
10／5	阿さひ	各施設事情についての話➡なし
10／19	愛染	片付け・掃除のやり方
10／26	今池	保護者との連携・対応
11／2	望	学校との連携
11／9	やまと	地域の役割・連携
11／16	長居	研究活動チームに分かれてパズル
12／7	都島	スキー合宿しているとこの情報➡怪我の対応
12／14	平和	気になる子への連携➡紙飛行機
1／11	育徳	６年生に向けての働きかけ➡来年度の保育料等について
1／25	なみよけ	６年生へのお祝いイベント
2／8	今川	学童の紹介・アピールをどのようにしているのか？➡来年度入る１年生について
2／22	四貫島	中高生活動の取り組み➡なし
3／1	愛染	新１年生お祝いイベント
3／8	育徳	

＊➡は変更されたテーマ内容です。

全国地域福祉施設研修会　第17回　児童部会

改めて子どもの居場所を考える　～確かな力を育むために大切にしたいこと～

平和の子子どもの家　　岡村　慎一
望之門学童クラブ　　大西　奈々子

テーマ：「子どもの居場所」

分散会では“居場所”というものを掘り下げていく時に、子どもにとっての居場所以外に、“自分の居場所は？”と指導員の居場所を自分でどう感じているか、“保護者にとっての居場所は？”と様々な角度で話しをしました。自分にとっては相談し合える仲間がいるか？保護者なら悩みを聞いてもらえる場として指導員が意識出来ているか等、現場の様子を情報交換しながら話しが出来ました。また、昨今 DV や虐待等が社会問題となっていますが、居場所というとらえ方だけではなく、“逃げ場所”（最後の砦）という捉え方も大切ではないか？という意見も出ました。家庭で愛され、集団の場で仲間と楽しく過ごすことは当たり前でありながら、そう上手くいかないケースもあります。その場合、家庭にいることが果たして幸せなのか？利用している施設がその子に本当に適しているのか？“居場所”というものを深く考えさせられる討論が出来ました。

討議終了後には「子どもの居場所にとって大切にしたい事を３つ挙げよ」との木全氏からのミッションに、まず全員から挙がった絶対条件が①安全・安心でした。ディスカッションには養護施設に従事する職員や主に放課後等に子どもと関わる職員（学童・放課後等デイサービスなど）が参加しており、それぞれの職種や見守る子ども達の背景は違うものの、施設・職員が“子ども達（保護者・ＯＢＯＧ）の安心・安全”となり大切にしなければならないという声が挙がりました。

子どもの居場所を確立し守っていく為には、私たち（職員）自身も働く環境の中で認められ②私たち（職員）の居場所だと感じ、個々の子ども達・保護者へ理念と願いを持って関わっていけるような環境が大切だとも挙がりました。学童や放課後等デイサービスでは“親が選択する時代”となり、プログラムに付加価値を付けた企業などの参入に「子どもにとって…」ではなく、親のニーズに添ったものになっている（習い事に近い感覚）傾向だとの声も上がりました。しかしこの流れを「親の勝手な思い」だと否定してしまわず保護者の歴史に思いを馳せると、競争の中で育ってきた子ども時代、能力主義、それによる成功体験から“過程が大切である”事を伝える難しさに試行錯誤されているお話も伺えました。集団経験や自己発揮など（学習や体操などの分かりやすい謳い文句ではない）自施設の願いをどう発信していくか、実際行っている活動内容等を情報交換する事の出来る場となりました。

討議の中で『主体的ではないと遊びではない』という言葉に端を発し、「集団で遊んでいる周りから外れて、一人でいる子を集団に誘うのは押しつけか？」「周りの【集団=楽しそう】をその子はどう感じているか」「見ているだけで今は満足かもしれない、何を願っているか」と様々な意見が飛び交いました。活動や遊びに対して大人は“願いを込める、何かしてやろう”と思いますが、子ども達は“遊びたいから遊ぶ、嬉しい・楽しそうだからやる”と捉えていると思います。『主体は子どもにある』『子ども自身が自己決定出来る』よう③子どもがNO（YES）と言える関係作りを大切にしたいと話されました。

分散会では児童養護施設施設長・職員、放課後児童支援員（名古屋・大阪）、大学院生（学童アルバイト）など様々な役職、地域（愛知・岐阜、三重、大阪など）を越えて意見交換が出来まし

た。環境や子どもの背景の違いといった所では、生活の中でそれぞれ重きを置いているポイントが違い、支援者が出来る事・力量の違いが見えてくるものの、その子どもの背景含めこれから歩んでいく人生に対し真剣に向き合っている大人の姿に、児童部会毎に活力を頂いています。第１７回児童部会も様々な形で児童福祉・地域福祉に従事されている方々と討議でき、自施設での活動に何が必要か施設内で共有していきたいと思います。

2018年度　振り返り

阿さひ保育園つくし会

吉野　裕志

今年はなにを書こうかな？と、研究会冊子を読み返してみると、自分はほぼほぼ研究会の振り返りをしておらず、好きな事を適当に書いていた。それは研究会の時間も一緒で、話あっている内容と全然違う事を突然言って、みんなを煙にまき、他の方々が軌道修正をかけてくれる事も多々ありました。正直、話をしている最中になにを言おうかまとまらず、言ってみたはいいものの、「あー、なんだっけ？もういいや、めんどくさ」となる事もしょっちゅうあります。人前で話をするのが苦手なので、人前で話を振らないでと言っていても、笑顔で話をふり、内心吐きそうになりながら言葉を絞り出す・・・何年たっても全く慣れないですね。

思えば小学生の頃から、参観日や運動会、音楽会、ありとあらゆる人前にでなくてはならない行事の数々、前日には眠れなくなるぐらい緊張をして、そんな性格なのに、なぜこんな仕事を選んでしまったのか・・・研修に行事、人前に出る事ばっかり、そもそも人見知りで、よく分からない人達の前では必要以上に緊張をするのに気が付けば前に立たされる。なにかの罰ゲームですか？でもまぁ、少しずつ知っている人も増えていき、緊張も多少はマシになっていっているような気もしないでもない気もしたり、しなかったり・・・いや、やっぱり緊張します。多分、ずっとドキドキしながら立たされ続けるのでしょう。

まぁ大人なら、多少は自分でどうにかしてくれって感じです。でも、これが子どもなら？

類は友を呼ぶのか、こう、自分の本音を上手く言えない子が自然と集まってきて、なにを言うまでもなく周りをうろちょろ。そのうち頑張るだろうと思った子はもう高１。他にも心配な子はいるけれど、同じ様になったらどうしよ？と、心配になる。でも、高１の子も、友達の前ではキャラを変え、明るいふるまいをしているようで「あー、この静かなキャラは俺の前だけか」と最近分かった。大人も子どもも、その時いる立場や場所によってキャラを変えなきゃいけない。大人になっても本当の自分なんてまだ分からない。無理はしていないはず、人前に出る時以外は。子どもには平気で「無理しないで」と言う。どうも、自分が出来ない事を子どもに言ったり、自分が言ってほしい言葉を言っているのかもしれない。

そんなこんなで今年も、年齢だけ重ねて人間的には成長もなにもしていない気がします。周りで小学生だった子達が20歳になったり、中高生になったり、成長を感じれるのに、自分はなにも変わらないなぁと・・・。そもそも成長ってなんだ？

来年は、今年よりはほんの少しだけ成長できたと子どもに自慢できるような１年にしたい。

今年度を振り返って

やまと保育園子どもの家
丸尾　咲貴

今年度初めて地域の子ども研究会への参加となり不安の中でのスタートとなった。最初の研究会では、分からない事ばかりで戸惑いも多かった。今年度のテーマとして「地域の子ども達の豊かな生活・成長を目指す」
～踏み出す努力・視点・研究・還元～　が挙げられた。最初の研究会で、テーマについて話し合いを行ったが、何もわからない私は、他施設の先輩方の話をただただ聞き取ることで必死だった。

そんな中、5 月に大地協の中でも大きな行事となる、ともだちドッジボール大会が開催された。今までの私は、ボランティアや引率としての経験はあったが運営側に携わること、また審判の経験も今年が初めてだった。
正直、ドッジボールのルールさえ曖昧だった私はルールの細かさに驚いたと同時に、自施設だけの行事では無く、他施設と合同行事を企画することで、仕事に対しての責任を強く感じた。大会当日は、子ども達の笑顔や試合中にみせる闘志の姿、他施設の友達や指導員との関わりを楽しむ姿が見られた。その姿を見た時、子どもに還元するということは、こういうことなのかと、実感した。

また今年度、児童部会にも初めて参加させてもらった。子どもの居場所とは何か。今の時代、早期教育社会で子ども達には、遊ぶ時間や居場所が無い。今の子どもにどんな課題があり、何を経験する必要があるのか。色々な視点から考え直す必要があると思う。子どもが安心で遊べる場所だけが居場所ではなく、基本となる安全の場所の中で、役割に応じ、多様な居場所が必要であること。改めて考え直すきっかけとなった。
また、グループディスカッションを通して普段お話を聞く機会のない指導員の方々とも意見交流することができたので、貴重な体験をすることができた。

研究会でのこの一年間は、私自身の色々な事に一歩踏み出すきっかけになった。
これからも、踏み出す努力を怠らず研究活動にも、よりいっそう積極的に取り組んで行きたいと思う。

最後に、小学生が少し苦手だった私が、学童指導員になり、小学生と対等に張り合って遊ぶことの楽しさや、色々な事を経験し、成長していく子どもの姿を見ると、この仕事の楽しさや、やりがいを感じることができた一年だった。
子どもたちが中高生になっても、また遊びにいきたい・仲間や指導員の顔がみたいと思えるような居場所（学童）を目指して、これからも子ども達と関わっていきたいと思う。

2019/02/14

愛染橋児童館学童クラブ　岡原　武

地域の子ども研究会をふりかえって

～大地協（地域の子ども研究会）らしさとは？～

地域の子ども研究会に参加して、３年目になります。研究会の友だちフェスティバルの反省会で、地域の行事や習い事の大会と日程が重なって、不参加の子どもがいるとの報告がある。子どもが選んでいるから仕方ない、また、そのイベントに負けない楽しさをという話し合いになりました。そして、他のイベントと違う**「大地協らしいイベントって何だろう」**という話しになりました。この時この場では、話し合いは進まなかったが、**私なりに「大地協らしさ」を考えてみました。**

子ども主体

子ども向けの楽しいイベントは色々あります。様々な企業のスポンサーが主催しているイベント、社協が主催しているイベントなどがあります。子どものイベントの中でも、大地協のイベントは「子どもが主体」という視点を大切にしているところが異なっています。それは、行事までの過程で、子どもの意見が反映されたり、子どもと支援員が一緒に行事を作っていると感じられるイベントです。

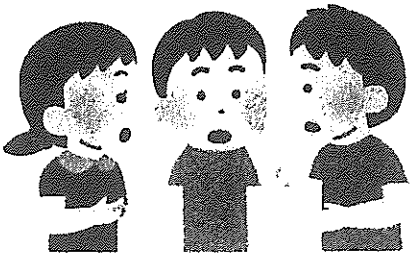
「子どもが主体」は時間をかけて準備をしたり、子どもの意欲が高まるように声をかけたりと、工夫が必要です。大人が決めたものを楽と感じている子どもいるし、決して楽なことではありません。しかし、子どもの生きる力を育むためには、子ども主体でないとイベントの意味がなさない。理想と現実のギャップもありますが、間違いなく、大地協の軸の一つになっています。

つながり

・10施設以上集まって、合同でイベントを計画・実施します。その中で職員同士のつながり、また、10施設以上から集まった子どもたちが交流をすることによって、職員の成長、子どもの成長につながると共に、自園の子ども集団の成長にもつながっています。

対話

・様々な施設が集まってくる職員同士の研究会で、自信がなく、自分の意見を言えないこともあります。しかし、子どもにとっていいものを作るために、いい対話が出来る集団を目指しています。最後のふりかえりの中で、「お互いの意見について、活発に言い合えるということが少なかった」という声がありました。今後の課題です。



まとめ

子どもも大人も主体性が持てるような環境づくりをする中で、対話をして、大地協らしさがあるイベントを作っていきたいと思います。

１年間の振り返り

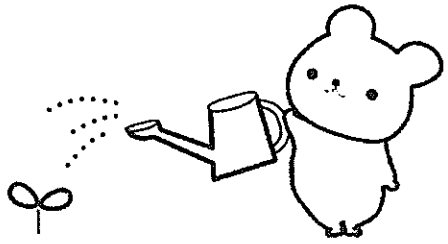
育徳園子どもの家
隈元　まひる

３月に６年生が巣立っていき、毎年のことだが、子どもたちの成長を感じるとともに、自分の関り方を見つめなおす時期となる。入学時なかなか言葉が出ずキャンプで初めて会話ができたこと、３，４年生の時にはケンカから子どもたち・保護者の方と話を何度もしたこと、高学年になり年下の子への接し方や外へ出た時の様子に驚きとうれしさを感じたことが思い出される。

そして、今年度は理由は様々であったが途中退園する児童が多く、保護者と話をしたり、子どもの話を聞いたりしながら、学童に求められていることとは、子どもにとって来たいと思える場所とはと悩むことも多かった。「子どもにとって居心地のいい場所とはなんだろう」と考えた年であった。そんな中、前年まで保護者主体であった行事が行われないことを知った子どもたちから「やりたい」と声が上がり、子どもたちが実行委員を作りフリーマーケットを開催した。この取り組みでは、広報・物品の集約などの準備から終了後のお金の使い道まで「こうしたい」「どうする？」「手伝って」と子どもたち自らが周りに声をかけて広げてき、子どもたちだけではなく保護者を巻き込んだものとなった。大きな行事もだが、日々のあそび・生活の中でも子どもが自分でやりたいと思い、失敗や成功があったとしてもやりたいと思ったことが実践できる場を創っていきたいと感じた取り組みであった。

地域の子ども研究会の合同行事では、子どもたちが主体的に取り組める行事をしたいと考えて進めてきたが、このやり方でいいのだろうかと悩むことが続いている。今年度はドッジボール大会で初めてのことを取り入れたが、まだ子どもたちが自分たちの意見が取り入れられた、自分たちでつくったと感じるまでは遠い。次に向けて子ども、大人みんなで考えていきたい。

自園にやってくる子どもたちの中には、「来るのが楽しい！」子もいれば、「行くことになっているから」という子もいる。保護者の仕事のために保護者が選んで来ることになる学童であるが、子どもたちの世界が広がる小学校期だからこそ、学校・塾・家庭以外の居場所として、子どもが選び、保護者が子どもの成長には必要だと感じる場所として、学童が必要な意義をもう一度考えていきたいと思っている。

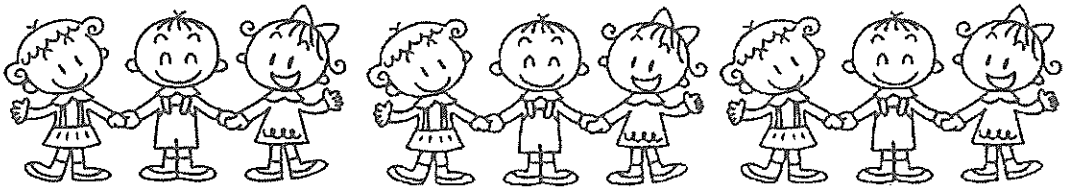


一年間の振り返り

今川学園子どもの家
指導員　浅井あすか

今年度は「交流・繋がり」ということを意識しながらの取り組みを行った一年間でした。自施設の中では「ドッジボールあそびをしよう」の日でも、習い事などで子どもの人数が集まらず、集団遊びが成立しにくくなっている現状です。大阪市地域福祉施設協議会主催の「ドッジボール大会」では、交流チームで試合を行う事や今年度はじめての取り組みとして６年生は自分たちの試合の審判をする等、他施設の子どもと繋がり合いながら作戦を立て、力いっぱいボールを投げて自分の力を試す姿が見られました。３．４年生は、他施設の子どもと協力しあいながら自分の力を思う存分発揮していました。初めての参加者も多い１・２年生は試合や雰囲気を楽しむと共に、普段の学童内で見る高学年の姿とは違ったカッコイイ姿を見て、憧れの眼差しで試合を応援する子ども達がいました。どの学年も大きな成長が見られ、自施設の中だけでは決して味わえない貴重な経験ができたように思いました。
「ともだちフェスティバル」では、「ドッジボール大会で出会った友だちが来るかなぁ～？」と楽しみにする子もいて、子どもたちが意識しながら行事に参加できていると感じました。施設対抗の大縄跳びでは、他施設の跳べる回数に刺激を受け「ともだちフェスティバル」以降、園庭遊びの時には、自分たちで練習をする姿が見られるようになりました。今年度、参加出来なかった友だちとも話を共有し「来年は一緒に行こう！！」と誘い掛けていて、来年度の行事の開催を今から楽しみにしている様子が見られます。

行事の開催には、家庭の都合により参加できない子、自信が持てず参加しない子がいますが、子どもたちが「一緒に行こう」と誘い合っている姿を見て、指導員としてこれからも、子どもたちの笑顔が溢れる行事の開催を目指して、子ども研究会の仲間と共に実践していきたいと思っています。施設間同士の繋がりだけでなく、人と人が繋がっていくことが、これからを生きていく子どもたちにはとても大切なことだと感じて欲しいと思っています。今年度は、子どもたちの姿から「繋がり」についてたくさん学ぶ事がありました。私自身も子どもと共に学び成長していきたいと思います。



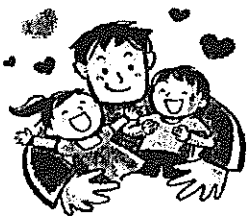
『 地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す
～踏み出す努力・視点・研究・還元～ 』

今池こどもの家　　多賀井 潤一郎

児童館や子どもの家・学童施設等を利用している子どもは「地域の子ども」です。地域の子どもは「施設利用児」ではないこともあります。私は今池こどもの家で勤務するようになり６年が経過しました。学童限定施設とは異なる幅広い年齢層の利用児に対応するべく、日々のプログラムや月次行事を考案したり、ご家庭の状況把握に努めるように心掛けています。今池こどもの家は登録制ではなく0～18歳の子どもなら誰でも単独（未就学児は保護者同伴で、校区外から来館する学童児は保護者了承のもとでの利用を原則）で、どこからでも自由に遊びに来ることができます。学校区や自治体の枠にとらわれず利用でき、利用料は無料です。登録制でないことや地域を限定しないことは利用児やその家族にとってのハードルが下がり、多様なニーズに応えることができます。

現在小学６年生になるＡ君は５年生の秋から今池こどもの家を利用しています。きっかけは、私が区内の勉強会で知り合った家庭児童相談員からの1本の電話でした。Ａ君は小学2年生の時から学校に行くことができなくなり、毎日を自宅で過ごしていたそうです。居住している地域で同年代の知人と顔を合わせたくないという理由から、それまで外出する機会が殆ど無かったそうです。数日後、居住校区から離れた今池こどもの家に家庭児童相談員と一緒にＡ君が来館しました。初めは他児の少ない平日の午前中１時間だけの利用でした。徐々に滞在時間を増やしていき、５年生の３学期には今池こどもの家に単独で来館するようにもなりました。この頃には、他児と顔を合わせることにも抵抗が無くなっていました。パワーを蓄えたＡ君は『学校に行ってみようかな。』と考えられるようになりました。週に数回の登校が可能になり、６年生の修学旅行にも参加しました。この春、Ａ君は学校の仲間と一緒に卒業し、中学生になります。

子どもには一人ひとりの思いやペースがあります。親の思いや支援者のアセスメントは時に個別性や主体性を配慮する視点に欠いてしまうことがあります。社会の仕組みの中で自分のペースが掴めず、死を選択する子どものニュースを目にすることがあります。周囲の大人による当事者を思う気持ちに関わらず、ボタンをひとつ掛け違うだけで最悪の事態を招いてしまうこともあります。私は、今年度の研究活動で「不登校」に関する学びを深めました。多くの書物や事例文書を手にする中で、私たちはどの様な立ち位置でどのような支援ができるのかということを考えてきました。その中で見えてきた不登校児が抱える思いや表出の仕方は「十人十色で千差万別」という何とももどかしい結末でした。対人援助は答え探しが難しい職業だと思います。もしかすると答えは無いのかも知れません。前述したＡ君のケースに関わる支援者の中には「早く学校に戻さないといけない」「学校に行けばどうにかなる」と意見や助言をする人もいました。もしかすると、無理矢理にでも学校に連れて行かれることで早く自分のペースを取り戻すことができたのかも知れません。でも、私は答えが出せないまま迷い悩む日々を過ごし、Ａ君と接している中で、彼が持つ雰囲気や性格から想像すると、Ａ君自身が「学校に行かない」という決断をできたからこそ、自分のペースを取り戻すに至ったのではないかと感じました。



私自身は支援を進めていく中で、そのケースにのめり込み、我武者羅に答えを探そうとしてしまい客観的な視点を欠いてしまうほど没頭してしまう傾向があります。そんな自分の未熟さに気付く度に、現場職員や上司、子どもが通う学校の教員や区役所子育て支援担当職員の方などに相談する機会を意識的につくるようにしています。私たち大人にとって、子どもの未来を守ることの責任は重大です。子どもの最善の利益を追求するためには、支援者自身も孤独であってはならないと思います。私にとって、色々な考え方を学ぶ場である地域の子ども研究会に集うメンバーは、バラエティー豊かで面白いほどに色々な考え方ができる個性の集まりです。ここには多様性を認め合える土壌があり、ホッと一息できる空間があります。これからも仲間との情報交換を通して、自分には無い新しい考え方を知り、目の前の子どもに寄り添う支援者としてまだ開花していない自分探しの努力をしていきたいと思います。

２０１８年度の振り返り

四貫島友隣館子どもの家
荻野　遙馬

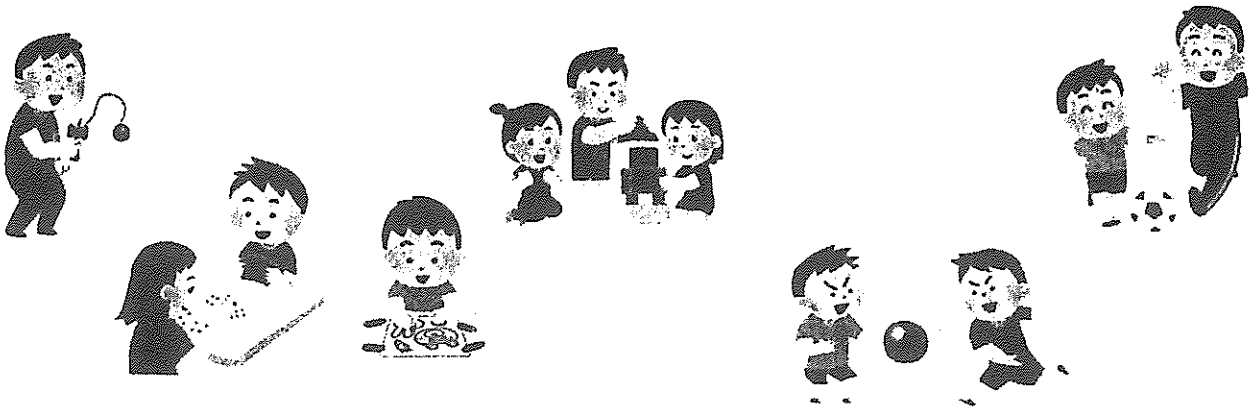
あっという間の一年でした。

５月のドッジボール大会。２年生が育徳園子どもの家・愛染橋児童館との合同チームで優勝。子どもたちと一緒に喜んでいましたが、後々考えると強いチームにおんぶにだっこで優勝させていただいたようなもので、それは果たして子どもたち自身が優勝したと言えるのか、と悩みました。今度こそ自分たちがやってやるのだ、とやる気になるのか、また便乗させていただきます、となるかは指導員の奮起のさせ方にもかかっているので来年こそは練習も作戦も準備万端で大会に臨みたいと思います。

１１月のともだちフェスティバル。日程がメインの学校の行事と重なってしまい参加人数が大幅に減少したので今回は不参加という形になってしまいました。自分のみスタッフとして受付などを担当し、初めて客観的に見ることができました。各施設のゆるキャラが登場したりペットボトルロケットが飛んだりととても華やかでした。子どもたち表情も明るく、とても楽しんでいるように感じました。その場に自施設の子どもたちもいて、自分たちで作ったゆるキャラで盛り上がったり、ロケットが飛ばずに落ち込んだりしているのだろうかと想像し、参加させてあげたかったと思いながら見ていました。

後半は園の建て替え作業による学童教室の引っ越しなどの施設の事情も重なり、行事が減ってしまったり参加できなかったりすることが増えてしまいました。地域の子ども研究会で「交流」を目標に行事を行ってきているにもかかわらずその場に参加させてあげられないのが本当に申し訳なかったです。そして研究会で学んできた多くのことを子どもたちに還元してあげることができていなかったと反省します。

研究会関係の事を振り返るだけでも今まで以上に自身の改善すべき点を知ることができた一年でした。さらに向上心を持って学び、吸収し子どもたちへ還元していけるよう取り組んでいかなければいけないと思います。



２０１８年度を振り返って

アフタースクールKIDSかわぐち

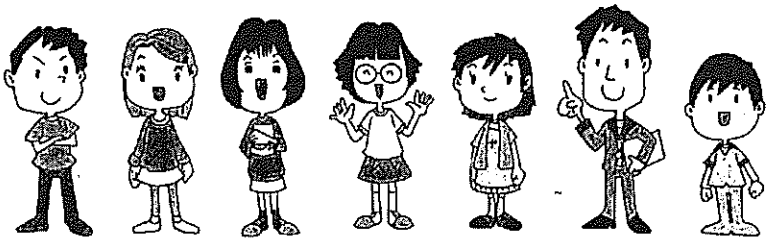
根本　栄輝

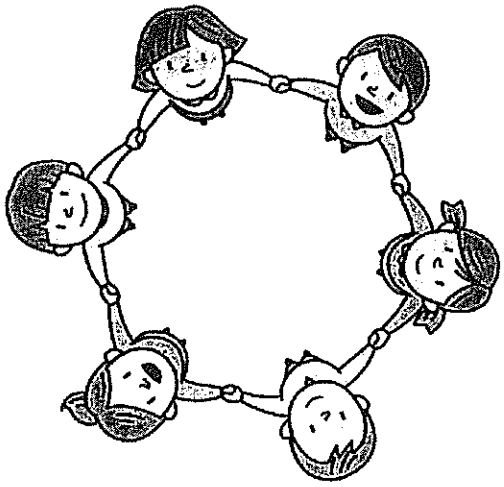
今年度が地域の子ども研究会に参加して３年目の年になりました。

わからないことが多くベテランの先生方が話し合っている事を聞くことしか出来ませんでした。自分から動き出さないと何も得られない、ということはわかっていたのですが、なかなかその一歩が出ませんでした。しかし、今年度は研究会の始めにサブタイトルを決めました。「踏み出す努力、視点、研究、還元」というものでした。改めて自分から一歩踏み出さないとダメだと言うことを再確認しました。
頭の中にその事をいれ、研究会に参加していくと、今まで見えなかった視点が多く発見できるようになって、1.2年目とは違い、とても充実した１年にすることが出来ました。
研究会の中でも、少しずつではありますが、自分の思いも発信できているのではないかなと思います。

自施設では、３年目の勤務となり、子どもたちとの信頼関係も築くことができ、笑顔の耐えない１年間にすることが出来ました。研究会で学んだことを施設に持ち帰り、実践し、子どもたちに還元していけた結果が、このみんなの笑顔だったのじゃないかなと思います。

これからも研究会の中でたくさんのことを学び、自施設の子どもたち、地域の子どもたちに還元していけるようにしていきたいと思います。





―今年度研究会を振り返って―

長居子どもの家　　米田

今年度は、自然災害について考える年でした。研究活動で防災について考えるようになってからまもなく、大阪北部地震がありました。自施設付近に大きな被害はなかったものの、建物が倒壊したり数日間水道等のライフラインが止まってしまう地域もありました。それを自分の身に置き換えた時、子ども達の命を守れる行動が取れていたのかと考えると正直自信がありません。研究活動では、各施設の避難訓練や備蓄について、６月18日の大阪北部地震についての初動対応～その後の対応等について聞くことができました。各施設比較してみて、実際に被災した時に対応できるための避難訓練が必要だと再度認識しました。また、今回ガスコンロを使用してお米を柔らかくしたり、パスタの麺を水で戻すなどの非常食を作ったり、ツナ缶を使用してろうそくの代わりに火を起こすなど非常時に使える方法を実践してみました。聞いたり見るだけではイメージがわきませんでしたが、やってみて本当にできるんだといざという時に使えると実感できました。防災については、施設にもこういう事ができるということを発信していく必要があると思いました。学んだことはもちろん、それを踏まえてこれからくるかもしれない災害に備えて施設でどういう取り組みをしていく必要があるのか話し合うきっかけにできたらいいと思っています。

ともだちドッジボール大会やともだちフェスティバルでは昨年度と同様楽しんで過ごす子ども達の姿が見られたものの、他施設との交流という面ではまだまだ難しいと感じる部分が多かったです。「〇〇の人めっちゃ強いなぁ～」「〇〇のとこ何してるんやろう」など他施設に興味を持っていることは明確ですが、自分から踏み出すことが出来ない所をどのように介入していけばいいのかが今後の課題だと感じました。全体の年間の振り返りの中にもあった、各行事が事務的な話し合いで終わることが多く新しいアイデアを出したり話し合う時間が少なかった、ですが個人的にその時に“自分はこう思う”と発言することができなかった・どういうことをすればより良くなるだろうかと積極的に考える事ができていなかったのが一番の反省点だと痛感しています。今後も行事を続けていく中で、全体が意識してどんなことでも発言したり提案を出すことでまた新しい取り組みが生まれていくと思いました。その為にまず自分から行動に移したり発言したりすることを意識していかなければいけないと再認識しました。

情報交換は今年度も各施設の取り組み方や悩み事を共有でき、自施設にも取り入れたいと思う事が多くありました。研究会という場を通してたくさん学べたことは自分にとってまた一つ大きな糧となりました。１年間ありがとうございました。

１年間を振り返って

長居子どもの家　川畑　亮輔

今年の１年間を振り返ってみると、研究会のサブテーマにある「一歩踏み出す勇気」という言葉の意味を改めて受け止めました。

研究活動では不登校について研究しました。知らなかった問題や、不登校の子どもを支援している団体や行政、地域の不登校について研究している大学の教授の資料等、自分で知ろうとしないと、知れない事がたくさんありました。

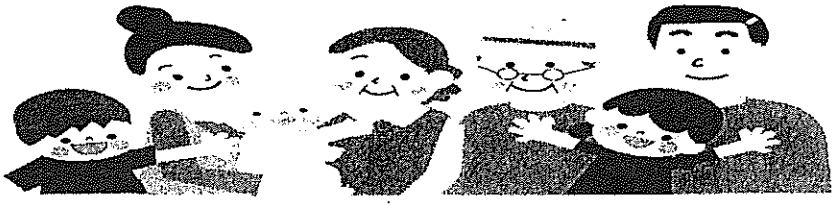
振り返ると自分は今まで様々な問題を知らなかった事もありますが、「知ろうとしなかった」のだと思います。正直、知ってしまうと今の自分の仕事が増えてしまい余裕がなくなり、本来の保育士の仕事がおろそかになる事、そして何より自分の負担が増える事が怖かった。

そんな中、東京での全国研修に参加する機会がありました。阿部先生の講演で「制度に入って、制度を出る」とお話がありました。心に響く、重たい言葉でした。

どこか制度の中で家庭への支援を考える事が多くなってしまい、それ以上の支援が出来ていない事が多いし、考える事すら少ない。そこから一歩踏み出す事で、今まで手の届かなかった家庭や地域にも手を伸ばせるかもしれない。しかしその覚悟と勇気は相当な物だと思います。簡単に「明日から頑張ろう」と思ってできる事ではありません。自分自身もそうであるように、いまだに覚悟がたらず、なかなか一歩が踏み出せずにいます。しかし阿部先生のお話を聞いたり、様々な福祉施設職員の方と話すうちに、保育士であると同時に、地域福祉施設の職員なのであると意識する事が出来ました。

様々な方から頂いた「一歩踏み出す勇気」。子どもに、家庭に、地域に一歩踏み出す事で、様々な困りやしんどさを抱えた人たちが、周りにいる事が見えてきました。そのしんどさを全て受け止め、救う事が出来る。とは思いませんが、そんな人達の為に何ができるか考え、寄り添える場所としての地域福祉施設職員でありたいと思いました。

自分自身が地域に出る勇気、制度から出る勇気、保育士だけでなくその施設に勤めている地域福祉施設の職員である事を意識し、目の前の子どもや家庭、そして地域の子ども達の課題に向き合い、できる事を考え、行動に移していきたい。その覚悟を持ってこれから働いて行く勇気を得た１年でした。



研究活動を振り返って

望之門学童クラブ
大西　奈々子

今年度、地域の子ども研究会では“地域福祉施設としての防災・減災、災害後何が出来るのか～災害後を見据えて、今出来る事は何か～”というテーマでの研究活動に参加させて頂きました。

このテーマでの研究活動は数年前から自身が望んでいたもので、特に“施設内で子どもに伝えられる事は何か”と“災害後”というキーワードについて何が出来るのかを知りたい、他のスタッフと話し合いたいと思い進めてきました。

乳児・幼児と違い、“地域で子ども達だけで過ごす時間”があるという小学生にとってなくてはならない経験が、防災という視点では子ども達の知識が乏しい、災害があった際に子ども達自身が“危機感”を感じ、判断をし、身の安全を確保するという非日常を、どう乗り越えていけるのかと考えていました。子ども達の知識や危機意識だけではなく、普段見守っている私たち職員がどこまで“防災を子ども達に伝える”という事を意識し過ごしているのか、子ども達の命を守る為の必要な知識をまだまだ私自身が理解していないと改めて感じました。研究活動を終えた今、それらを得られた訳ではありませんが、普段の遊びや生活の中で防災・減災、災害後に役立つ知識を子ども達が楽しみながら知り、いざという時に何か一つでも思いだし、気持ちに余裕が生まれる事を願ってこれからの活動に取り入れていけるよう意識したいと思います。

そして災害後の私たちの役割は何なのか。災害後にわかりやすく持っている力を発揮できる職業（医療や土木業など）もある中で、地域福祉施設職員従事者として保育士・学童指導員として出来る事・力を発揮すべき役割は何かを考えたいと思っていました。これは自身の持つ気持ちの弱さから「災害後に子ども達を守る為に信念を持って“子どもに遊びが必要だ”と発信出来るのだろうか？」と不安があり、事前に考えておく事で、子どもの気持ちを代弁したいと思った場面に出会った際に理論を持って伝えられるようになっておく、それが自身の災害への備えの１つと感じ本研究に至りました。信念を持って「子どもが遊ぶ重要性」を訴える大人になりたい、その一点が本研究に至る原点でしたが、「どんな状況でも信念を持って周りに発信し、理解してもらえるよう（理論や気持ちの）準備をしていく事」「子どもの意見を言える大人になりたい」と研究活動で討議した中で皆さんに力を頂きました。

「自分に（自分たちに）出来る特化した役割は何なのかを知っておく事」「周りを巻き込んで出来る事がある」と研究活動内で結論付けた事で、次は具体的な実践の中で子ども達と共に学び、施設職員と共に特化した役割とは何かを探り、地域の方々と共に防災と災害後に備えられるよう関係を深めていきたいと思います。

地域の子ども研究会に参加して

～踏み出す努力・視点・研究・還元～

平和の子子どもの家
岡村　慎一

私が地域の子ども研究会に初めて参加させて頂いたのは５年前、今回参加させて頂いたのが３回目になります。毎回研究会を構成しているメンバーは違います。前回も一緒に参加させて頂いたメンバーもいますが、毎年どこかの施設は研究会に来られる指導員が変わるので、そのメンバー全員が同じで構成されることは無いでしょう。雰囲気や方向性が、メンバーのカラーによって変わるのが楽しいと感じています。

今年度のサブテーマは表題の副題にある通りです。まずは今の環境に満足しないで新しいことにもチャレンジし、より良くする為に環境を変えることを恐れず、皆で何かを作り上げる時に他者と意見が違っても自分の思いを伝え、「踏み出す努力」を大切にすること。他者と意見が違っていても、１つの議題に対し、様々な角度から見る自分以外の意見、「視点」を取り入れ、自分の視野を広げていくこと。そういった努力と視点を大切にしながら仲間と「研究」をし続けること。その時に指導員だけの目線ではいけません。子どもたちの意見を聞くこと、実際の子どもたちの姿から見えてきたことを取り入れて考えることが大切です。そしてその研究の成果を、しっかり各施設の保育や、地域に「還元」していくこと。そしてその後見えてきた次への“課題”をそれぞれの研究会メンバーが再度研究会へ「還元」し、循環していくことがこのサブテーマの意味だと思っています。

今年度の主な行事として、ドッジボール大会、友だちフェスティバル、合同遠足を行い、年間を通して“交流”を大切にして取り組んできました。また、行事だけでなく普段からも“交流”を意識出来る様、新聞作りや、交換ノート等も取り組んできました。今年は“交流”とは何か？と研究会で議論をする機会がありました。そこで見えてきたのは、「交流は大人がさせるものではなく、自然と生まれるものだ」ということです。もちろん交流をさせていた、という意識では行っていませんが、交流する為にという考えに固執するのは違うと感じました。他施設との合同行事に参加し、その空間にいるだけでも、１つの交流になると思います。自分たちの施設や学校だけでなく他施設の子どもたちと触れ合い、交流することでまた新しい世界、新しい自分を知るのではないかと思います。そういった機会、環境を作ることは大切だと感じました。

研究会のメンバーは毎年変わります。しかし、いつも議論の中心にあるのは“子どもたちの為に何が出来るか？”それは変わりません。メンバーが変わればカラーは変わります。しかし、その新しい「視点」がまた新しい「循環」を生み、より良い活動となっていくことを願います。

2019年度　地域の子ども研究会　参加施設一覧

施設名	郵便番号	住所	電話番号	FAX
愛染橋児童館 学童クラブ	556－0006	浪速区日本橋東 2－9－11	6632－5640	6632－5645
阿さひ保育園 つくし会	545－0051	阿倍野区旭町 3－1－6	6631－4718	6631－1607
育徳園 子どもの家	545－0021	阿倍野区阪南町 5－15－28	6621－1901	6629－1979
今池こどもの家	557－0016	西成区花園北 2－16－26	6632－7020	6632－7020
今川学園 子どもの家	546－0003	東住吉区今川 3－5－8	6713－0277	6719－4755
四貫島友隣館 子どもの家	545－022	此花区春日出中 1－15－13	6461－3713	6462－1072
長居子どもの家	558－0004	住吉区長居東 4－11－16	6691－3369	6691－8292
望之門 学童クラブ	545－0052	阿倍野区阿倍野筋 5－13－17	6651－8650	6652－8841
平和の子 子どもの家	535－0022	旭区新森 7－1－5	6954－0524	6954－1961
都島児童館 子どもの家	534－0021	都島区都島本通 3－16－10	6921－4385	6921－4385
やまと保育園 子どもの家	559－0014	住之江区北島 3－17－1	6682－1746	6682－1786
アフタースクールKIDS なみよけ	552－0001	港区波除 4－4－18	6583－5230	6583－5231
アフタースクールKIDS かわぐち	550－0021	西区川口 3－1－23	6599－9070	6599－9071

発行

2019年3月31日

特定非営利活動法人

大阪市地域福祉施設協議会

小学生の身体・心の発達表

☆この発達表はあくまでも標準的な小学生の発達を記したものです。子どもとの関わりの参考に活用して下さい。

分類	低学年			中学年			高学年		
	学年	男子	女子	学年	男子	女子	学年	男子	女子
	1年生	119.6	118.8	3年生	130.9	130.5	5年生	142.2	143.7
	2年生	125.3	124.6	4年生	136.4	136.9	6年生	149.1	149.6

	発達の特徴	実際の子どもの姿	発達の特徴	実際の子どもの姿	発達の特徴	実際の子どもの姿
身体・運動面	・幼児時代の特徴を残したまま、手・足をはじめとして、活発な活動期に移行する。 ・2年生になると、体の抵抗力や運動能力も増し、安定した成長期に入る。 ・玩具や遊具も繰り返し遊び、動作を繰り返すことで確かな筋肉の操作ができるようになる。	・ボールを投げる際、両手投げから片手で投げられるようになり、遠投距離も徐々に伸びていく ・戦いごっこや、鬼ごっこなど動きが激しい遊びを好む。	・体の発達に個人差や男女差がみえはじめる。今までの子どもの体形から、身長や体重が増え、また筋肉の発達がみられ、女子は体つきにも変化があり、丸みをおびた体つきになり、初潮を迎える子もいる。 ・体がよく動き周り、1つのことに長時間集中して作業ができない、気が散りやすいところもあれば、物事に打ち込みだすと夢中になるところもある。	・低学年の子どもとドッジボールや相撲等、運動遊びをする際に、体格差や力の差が出てきている為、グループを分けたり、ハンデを必要とする場合がある。 ・個人は友達としていると話しに夢中になったり遊んでいる子が気になって集中しきれていないことがある。夢中になれる遊びを見つけると長時間集中することもある	・男子は肩幅が広がり、声変わりが始まる。女子は初潮が始まり（60%）乳房が発達し始める。 ・男女の体力や運動能力に差が出てくる。	・体格が良くなり、大人と同じ背丈の子どももいる。また、男子の成長が早い子どもは声変わりを始める。 ・ドッジボールが得意な子ども、苦手な子どもがはっきりする。男女差も現れるが、女子でも得意な子どもは自信を持って取り組む。
人間関係	・教師や母親に依存し、大人との1対1の遊びを好む。 ・集団で遊ぶこともできるが、自己中心的で、友達同士の結びつきは弱い。 ・集団の中での自我が発達する。自分の思い通りにならないことや、相手の立場でものを考えることを少しずつ覚えていく。	・大人との関わりを求め、だっこや、おんぶなどの、触れ合うスキンシップを求める。 ・上級生にかまってもらいたくて、ふざけて、手が出てしまい、やり返されて泣く。 ・上級生の真似をしたがる。 ・おにごっこなど、自分が鬼になったり、都合が悪くなったら泣く。 ・出来る子どもに引っ張られて、やらされている子どもがいる（嫌と言えない） ・年上への尊敬や恐怖等の感情が芽生える。 ・女児二人で人形遊びをしている。お互いがイメージする話しの展開ではなく、ロげんかする姿も見られるが、自分の意見も伝えながら、相手の思いを受け入れる姿が見られる。	・親離れが始まり、自分の考えで判断し、行動する独立心・自立心が出てくる。親からの干渉を嫌がるようになる。 ・仲間意識が高まり、組織的集団的な行動をするようになる。 ・自分の主体的な判断で行動していくようになる。	1,2年の頃は親が迎えに来ると離れ寄っていたが、3,4年になると顔も見ずあそび続ける様子が見られる。友達と約束をして学童を休むことも増えてくる。 ・4年生同士で固まって（男女問わず）徒党をしている。 ・女子のグループが出来て、仲間外れなどの関わり方等のトラブルも増える。 ・低学年に偉そうな態度を取る。 ・自分が出来ることが出来ない人を見下す。 ・困ることがあっても、指導員に助けを求めず自分で考えて解決（臨機応変）出来ることが増えてきた。	・親から離れて一人立ちしていく時期。親に対して秘密の世界も大きくなり、その中にはいりこまれたくないという気持ちも出てくる。 ・交友関係が広がってくるので、家族よりも仲間同士の交流関係を大切にする。 ・いじめが潜然化してくる。潜在化し陰湿に。集団で特定の子を嘲笑したり、侮辱したり、乱暴したり、無視したりするようになる。	・親に自分の意見を言う子どもが増えてくる。しかし、自分の思いを言えない子どもは「言われへん」と支援員に愚痴る。 ・反面、周りの視線を気にするし、あまり甘えなくなる。弱音をあまり言わない子どももいる。 ・親に言って欲しくないことがあるようになる。 ・「学校の友だちと遊ぶから」と学童を休むことが増える。 ・異学年の関わりが役割として、任せられることが多くなり、異学年や大人との関わりの幅が広がる。 ・下の学年と遊ぶ時にやり過ぎないように気を使う姿が見られる。 ・隠れて悪口を言う姿が見られる。また、物を隠して相手を困らせる。 ・先生の悪口を言ったり、大人の嘘を見抜く。
思考・言語・価値観	・自我意識がつよくなる，社会性、すなわち「自分をコントロールする」能力というのはまだ未発達であり、自己中心的な言動から友達と上手く遊ぶことができないというような問題もしばしば起こる。 ・空想時代の最中でなりきり遊びが中心。「アニミズム」の代表のような時代を過ごす。アニメや動物物語、昔話などを好む。 ・大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができる。 ・言語能力や認識力も高まる。大人の話に口を入れるなどの「おませ」ぶりも出てくる。この時期の思考は「吸収期」でもあり、乾いたスポンジのように周囲の情報や刺激をぐんぐんと吸収する。 ・数の保存が理解できるようになる。 ・量の保存が理解できるようになる。	・鬼ごっこやボール遊びなど、自分がタッチされたり、ボールを当てられたりすると、泣いたり、拗ねたり、怒ったりとする。 ・友達との協調性も出始める中、自分の思い通りに行かないと泣く。 ・価値観・感者面では、アニメなど2次元が中心で、見立て遊びや・なりきり遊びを好む ・主に女児が中心で、他の男児が部屋を走りまわる・嘔吐をする・など、決まり事やルールから外れることを許さない。「先生にいうでー」「先生ー、○○君がこんなことしてたー」と正義感が強い。 ・周りの大人や先生が絶対的な存在となり、口調も真似をする。 ・言語面では、小学校で友達同士で流行っていることや、下品な言葉遣いもするが、その掛け合を楽しむ。 ・年上の友達の口調の真似や学校での友達からの影響で言葉遣いが悪くなる。 ・おやつの配膳をするときに、友達分と自分の分、余りの分など数を理解して分けることができる	・友だちとワイワイ、ガヤガヤと集団で遊ぶ時期（ギャング・エイジの時期と言われている） ・冒険好きで、好奇心が旺盛なると共に、スリルを求め、決まりを破ったり、禁止事項を破りだすようになる。自分ひとりで出来ないことも、友達同士の集団で規律に反する行動をします。 ・競争心が旺盛になり、負けず嫌いになる。けんかになることもしばしばあります。他人より抜きん出てえばりたがる時期でもある。 ・自分の悪さを指摘されると、理屈をつけて言い訳・言い逃れをする知恵が働く。 ・重さの保存が理解できるようになる。	・勝ち負けやボールが当たった当たってない等チーム戦でもめることが多い。 ・崖すべり、木登り、プロレスあそびなど、危険な遊びもするようになり、怪我も増えてくる。 ・テレビのお笑いを真似た行動、ふざけた行動、笑わす行動を好む。 ・スポーツやゲームの勝負に夢中になり、いろいろなスポーツの模倣遊びをする。スポーツ、習い事、趣味などに興味をもつ時期ですから、それを生かして身につけさせていく、よいチャンスでもある。 ・注意されると「だってな」「あいつも」が多い。理屈で説明すると納得する。 ・見てない所でゴミを捨てたり、ドッジボールを蹴ったり、トイレ掃除を雑にしたり、宿題をしてないのにしたと嘘をついたりする。みんなで何かをするときに数人でめんどくさがってボイコットしようとする。 ・粘土の様に形が変わっても重さは同じ	・正義感が強く、決定事項に違反した場合は級友を厳しく批判し避難を与えます。 ・級友からの批判に弱く、気にする。 ・大人の言動に対する批判力も高まる。理屈に合わない大人の言動には、厳しい批判や非難を与える。 ・自我意識が発達し、精神的に自立していきます。 ・性意識に変化がある。恋愛感情が芽生える。 ・物事をある程度対象化して認識することができるようになる。対象との間に距離をおいた分析ができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる。自分のことも客観的にとらえられるになるが、一方発達の個人差も顕著になる。	・公園に行く途中で、列からはみ出て喜んでいる5年生がいたが、指導員が注意すると、他の5年生が「おまえ、しょーもないんや」と級友を批判する。 ・公園に行くと人がいつもより多かった。子どもたちには説明をせずに、毎回やっている鬼ごっこをやらなかった。6年生の子どもは「何で公園に来て鬼ごっこをしない？！」と非難する。指導員の説明不足を感じた。 ・自己肯定感を持ち始めるじきであるが、個人差も大きく見られる。自己に対する肯定的な意識を持てず、劣等感を持ちやすくなる。 ・誰と付き合っているなどの会話が友だちや支援員とすることが増えてくる。ドラマの話などが増える。 ・嫌な友だちと距離を持てるようになる。中学年までは嫌でも同じ場所にいるので、一緒に遊んだりするが、高学年になると、自分で距離を持って遊べるようになる。 ・6年生になると、将来の夢等を考える機会を持つことが多い。 ・物ごとへの解決策や活動の方法等を自分たちで考え作っていく。
遊び	・指先を使った遊びやピース数の多いジグソーパズルにも集中して取り組もうとする。		・ルールが難しかったり、複雑な遊びを取り入れるようになる。		・男子はサッカーや野球などの習い事を始めて、厳しい練習にも参加する姿が見られる。 ・トランプやボードゲームなどの知的なゲームを集団で楽しむ姿が見られる。	
	・公園の遊具、鬼ごっこ（男女） ・かくれんぼ（男女） ・虫取り（男子） ・なわとび（女子） ・草野球（男子）		・サッカー（男子）・縄跳び（女子） ・公園の遊具（男女）・虫取り（男子） ・草野球（男子）・鬼ごっこ（男女）		・公園の遊具で遊ぶ（男女共通） ・なわとび（女子） ・サッカー、バスケ、草野球（男子） ・おにごっこ（男女共通） ・好きな外遊びなし（女子） ・ゲーム、インターネット、携帯 ・ボードゲーム（人生ゲーム、野球盤） ・カードゲーム（トランプなど）	

小学生への配慮・課題

低学年	・　小学校低学年の子どもは小学校の中では確かに一番年下ですが、「小学校で最年少だから」と必要以上に手出しをする必要はありません。必要以上に手出しをしてしまうと、世話をされることが当たり前になってしまい、とたんに何もできなくなってしまうということになりかねません。子どもの力を信用して任せてやり、それができた時には褒めてやることで、「自分もやればできる」という自己肯定感を持たせてあげることができます。とはいえ、低学年の子どもはまだまだ大人の手助けも必要です。 ・　学校の用意をする時には忘れものがないかどうかのチェックや、必要な物の準備などは大人がしてあげるようにしましょう。 ・　学校での話をなるべく聞いてあげることも大切です。低学年のうちはまだよく話もしてくれる時期なので、こちらが聞いてあげるといろいろな話をしてくれるはずです。学校生活には楽しいことばかりではなく、嫌なことや辛いことがもちろんあります。こうした話を聞いてあげることは、気持ちのはけ口になるだけでなく「どんなにつらい時でもお母さんがちゃんと聞いてくれる」という大人への信頼感を育てることができます。 ・スポンジのように、周囲の情報や刺激を受ける時期なので学童でも各学年に応じた言葉の掛け方や、注意の仕方。そして、指導員として適切な言葉掛けや口調を意識し、関わっていくように配慮する。また、学習は異年齢児と過ごすことが多い。 ・特に１年生が上級生との関わりの中で上級生の圧力を感じてしまったり萎縮してしまわないように、常に子ども一人ひとりに丁寧な言葉掛けや思いやりの心を持てるように指導員として関わっていくように配慮していく。
中学年	・発達心理学では、２～４歳頃を第一反抗期、１２～１４歳頃を第二反抗期と言う。これに対し、小学校中学年に現れる口答えは、自我意識が芽生えて、親から離れて、自分の判断で行動しようとします。この時期を「中間反抗期」とか「口答えの時期」等と言います。 中学年の口答えは自発性が発達してきた証拠なので、親が無理に抑えると青年期になってから親から独立した行動がとれない青年になる。 ・個人差はあるが「めんどくさい」「なんでそんなことせなあかんの？」「は？」という様な返事が増える。４年生になり後半になってくると落ち着いてくる子が多く、特に女子は落ち着いてくるのが早い。文句を言う日もあれば、指導員を手伝おうとしたり、低学年の面倒をみようとする姿が見られる。文句を言いながらも頭ではわかっているので、大人が思うペースに無理やり乗せず、本人の思いも尊重しながら関わる様にする。 社会性の急速な進歩に従って、道徳性も変化が見られる。次第に何故その道徳性が規範として必要なのかを自覚的に理解しはじめ、道徳性の発達段階では一段階前進する時期といえる。友達関係でのトラブルや思いやりが見られた場面ではしっかり仲立ちする中で何が良かったのか、何がいけなかったのか話し合う機会を作っていく。
高学年	・少子化や少子化の影響により、遊び仲間がいなくなっている。ギャングエイジの消滅。 ・今まで何でも話していた子どもが、急によそよそしくなったり、親と話しもしなくなったりするので親は当惑しますが、この時期はまさに親からの自立の時期、友人の中で自分を見つめ直す時期と考え、今までよりも少し離れて子どもの成長を見守ってやりたいものです。 ・子どもも10歳を過ぎると、夢や将来についての抽象的な思考ができるようになりますが、同時に自分について考えだすことも多くなり、大人からすると考えていることが分かりづらくなってきます。 ・また体の面でも発育が著しく、第二次性徴の始まりから性を意識し始めます。特に6年生ともなると学校の中でも役割が多く忙しい生活を送るようになります。 ・友人関係においても「空気を読む」ということが求められるようになり、中には対人関係が上手くいかず孤立してしまうという子も出てきます。 ・親というのはいつまでも「子どもは子ども」という気持ちが抜けきらず、いろいろと口出しをしてしまうこともあるかと思います。しかし高学年のこの時期の子どもは、特に親に干渉されることを嫌がります。子どもと言えど1つの個性を持った立派な人間であり、親の望む通りには動かないのだと割り切って接することが大切です。

参考文献

小学生の心が分かる本（低学年と高学年で違う処方箋）　原田正文

父母と教師に役立つ学級懇談会の話材集　http://www.ondoku.sakura.ne.jp/fuc3.html

子どもの発達特性を知ろう　http://fuji.pro.tok2.com/hattatu.html

父母と教師に役立つ学級懇談会の話材集　各学年の発達特徴と対応の仕方　http://www.ondoku.sakura.ne.jp/fuc3.html